

堀内 勝*

Masaru HORIUCHI *



一日の「日時」 時を刻む アラブの「時制」の考察

Time and Day: Traditional Time-System of the Arab People —An Investigation of Basic Cultures of the Arab Folk

目次

はじめに

第1章 時を刻む

第1-1節 「時間」とは 分節概念・用語について

第1-2節 一瞬・瞬間・瞬時

第1-3節 一刻・一時・一時間

第1-4節 長いスパンの時 時代、世紀ほか

第2章 一日とは

第2-1節 一日の概念

第2-2節 「昼」の概括 用話ナハール

第2-3節 昼の前半 朝・午前 第三分

第2-4節 昼の後半 夕・午後 第四分

第2-5節 昼間の細分・時間分割概念

2-5-1 日の出の頃

2-5-2 午前・朝

2-5-3 昼・正午頃

2-5-4 午後・夕の頃

2-5-5 日没・日暮れの頃

第3章 陽光、陽射し、陽向、陽かげ、^{かげろう}陽炎、^{かげろう}蜃気楼

第3-1節 陽光 日射し

3-1-1 陽光、陽射しについて

3-1-2 日射し 「朝日」と「夕日」について

第3-2節 「日影」「日陰」

3-2-1 「日影」、「日陰」について

3-2-2 「朝日かげ」「夕日かげ」

第3-3節 ^{かげろう}陽炎とその精「^{かげろう}蜃気楼」

第4章 一日と旅

第4-1節 昼旅と夜旅

第4-2節 夜旅の諸相

おわりに

*中部大学名誉教授（元国際文化学科教授）

はじめに

この稿ではアラブの基層文化の追究の一環として「時制」を採りあげる。人間生活において、時制は大まかに言えば日常の日課、暦や祭礼、歳時習俗の目安となる日・月・季節・年を扱えばある程度の「時」の民族概念の把握はできよう。筆者の意図は、アラブ基層文化において、特に遊牧民の基層文化において「時」の分節概念を構築してアラブ社会の特色を浮かび上がらせることである。1) 最小単位である一日およびその分割と具体内容、2) 一日の積み重なりからなる一カ月およびその分割と具体内容、3) 一カ月の積み重なりからなる四季・一年およびその分割と具体内容、さらに一年を単位とする世代、時代、世紀などの具体相、それらをアラブは「時制」としてどう捉えていたか、が構想の中にある。「時制」の考察によって日月星辰や信仰を含めたアラブ的な自然観の特色、基層文化概念も浮き出てきているはずである、日常的な小さな諸事や些事においても、祭事や国家的行事の思考概念を反映させるような大きな特徴においても。

本稿では歴時的に「時制」のキーターム（鍵概念）用語を読み解くことによって、文化の中にどう位置づけられるかを観て取って行きたい。本稿では、その基礎であり、その最小単位となる「一日」を扱う。「時制」であるから、まず「時間」とは、として「時間」の概念、そしてその「時」の分割概念、最短の「一瞬」、短いスパンの「一刻・一時」、長いスパンの「時代・世紀」ほかを大まかに把握する。次に「一日」とは、一日を構成する「昼」、「夜」を扱う。但し本稿では「昼」のみを扱う。「夜」についてはすでに筆者は稿を残しており、以下にそれを記しておく。この前稿が随分と発想の元になっている。次の第2章では「昼」の時の刻みを構成する「朝」、「昼」、「夕」について、さらに「昼間」の細分・時間分割として、日の出の頃、午前、昼頃、午後、日暮れの頃として、具体相を分析してゆく。次の第3章からは少し視点を変えて、一日の「日」すなわち「昼」の象徴でもある「太陽」の属性、「陽光、陽射し」、「日影、日陰」として、太陽が占める昼は、主舞台である明るさ・熱さと〈陽〉の部分。裏舞台である暗さ・涼しさと〈陰〉の部分。この陰陽両者について述べる。この章末の3節では太陽の日射しの産物である「陽炎」、「蜃気楼」について述べてみる。なおアラブ世界はシアジア文化圏に入るので、当然「昼寝」の文化についても触れねばならないが、これについてもアラブの睡眠観として下記の前稿に言及しておいた。最後に「昼旅と夜旅」と題して「夜旅」との関連から「昼旅」とその相関を扱うことにする。

前稿について：「夜」、そのアラブ的表象」として『アッサラーム』誌に①～④回シリーズで、1980年前後に、三年越しに追究して1981年に発表したものである。それぞれの内容は：

①（前）第21号 pp.72-83 昭和56（1981）年3月

はじめに

第1章 アラブの睡眠観、第1節 昼寝の文化、第2節「宵寝」ということ、第3節 深夜のうたた寝、第4節 遅晩の睡眠、第5節 早朝の眠り

第2章 タハッジド（深夜の礼拝）、第1節 タハッジドの慣行、第2節 タハッジドの時間帯、第3節「夜の最後の三分の一」のご利益、第4節 タハッジドと寝過ごし、第5節 寝過ぎの防禦策、第6節 タハッジドの代替

②（中）第22号 pp.70-82 昭和56（1981）年6月

第3章「夜」の時間分割概念、第1節 一日の概念、第2節「夜」の概念、第3節「日暮れ」の頃概念、第4節「夜の最初の三分の一」の概念、第5節「深夜」の概念、第6節「夜の最後の三分の一」の概念、第7節「夜の一刻、一時」の表現法

③ (後-1) 第23号 pp.82-92 昭和56 (1981) 年9月

第8節 アラブの「五更制」について

第4章「月」と「夜」、第1節「月を賞でる者」の歌、第2節 Qamar (月) の表象、第3節「月光」についての概念

④ (後-2) 第24号 P82-92 昭和56 (1981) 年12月

第4節 Hilaal (三日月) の表象、第5節「月見」について

もう少し付言しておく、第1章では、時間帯と関連する睡眠が毎日の生活にも抱束力を持っていた、即ち昼寝が夜寝を補完するのではなく、むしろ主体であった点をもっと資料を整えて述べたかった。それを踏まえて本稿では「昼の後半」の部分で相当程度補ってはいよう。第2章では、「夜間の行」としての具体相にも言及しておきたかった。タハჯُّد「深夜の礼拝」の具体的な行、及びこれと関わってラクアを奇数に整え、「深夜の礼拝」にのみ用語としても用いられるウィトル、ラマダーン月の夜に行われるタラーウィーフにも触れたかった。これらは夜間活動としては宗教に関与する文化事項である。実生活では「夜旅」や「夜間放牧」など他にも多々ある。この二つの文化事項については第4章「一日と旅」で大分補っておいた。また第3章では「夜明前」に続けて「夜明け」を続けているが、夜明から昼なので本稿では前稿を補うに留めた。また第3章にからめて、「夜空」の月や星の形象、「夜吹く風」や「夜の雨」などについて、陰暦の一カ月に基いた「何夜月」の裏表等の概念分析を試みたかった。これらはその後の拙稿『星と動物 黄道十二宮の動物達 (1) (2) (3) (4)』及び「アラブ遊牧民のカレンダー、星の歳時記」で扱っておいた。第4章では月の宿である28星宿についても触れておきたかった。いずれも筆者の読書量の少なさと当時までの知見不足や紙幅の関係で割合わせねばならなかった。他日、稿を改めてアラブの「夜の文化的意義」として、更に資料検討を加え論じてみたい。

一日については上記のものを予め読んでおいて頂くと補完する形で一日の時の刻みの理解が容易となろう。特に①のアラブの睡眠観、②の第3章「夜」の時間分割概念の中の、第1節「一日の概念」として既に大まかには言及している。続く第2節「夜」の概念、第3節「日暮れ」の頃概念、も参照して頂くとより明確化したアラブの一日観が浮き出て来よう。「時制」に関わる基本的事象なので、多少重複することになるのであるが、昭和56 (1981) 年 (上の論考を「前稿」と略して参照しながら) 以降の筆者の新たな30年以上の知見も交えて述べてゆきたい。

また少しでも理解の助けとするために、事例がある場合には章や節の中に適宜挿入しておいた。事例の多くは、ハリリー作『マカーマート』拙訳 平凡社東洋文庫 I ~ III、およびハマザーニー作『マカーマート』(1)『イスラーム世界研究』第5巻1-2号 (2012年2月)、(2) 同誌 第6巻 (2013年3月)、(3) 同誌 第7巻 (2013年3月予定) からのものである。

第1章 時を刻む

第1-1節 「時間」とは 分節概念・用語について

時間という抽象的な第四次元的な対象を扱うわけであるが、手始めに二つ事例を挙げておよその時の感覚がどのようなものであるか知っておこう。

事例1 時間の長短の事例として：さて、今私はここに一人物のいることを申し上げたい。ものを書けばこの上なく巧みにまた彩やかに書き上げ、声を発すればこの上なく優れた表現で聞かせる。長い時間を与えれば（長口舌させれば ashaba）、見聞する者に黄金にも等しい反響を残し、短い時間ならば（短縮させれば awjaza = ikhtasara）、さびの効いた風刺を与え、即興詩を作らせば、人を讃嘆させ、その独創の才は彼を恨む者をなぎ倒してしまう、そのような人物を！

（Har.6話 拙訳 I 202）

事例2 手間をかける、時間をかけるの表現の事例として：「分りました、しかし忍耐も寛大さの資質の一部でありましょう？ ですから無闇と非難したり侮辱することは控え願います。それでは謎々合戦とやりに参戦することに致しましょう。どちらが勝者になるか裁いてもらうことに致しましょう」。これを聞くと一同の憤懣も治まり、怒りも鎮まった。老人の方から謎々合戦の条件を彼らに対して（＝不利な条件を）、彼らのために（＝有利な条件を）提示した。一同には異論が無かった、そして老人の方から始めるよう催促した。老人は時間をかけた（amsaka）、サンダルの鼻緒が結わえられるほどに、ラクダの腹帯がきつく締められるほどに。ややあって一同に言い渡した、「さあ聞きなさい！ あなた達の思慮の浅さが記憶に残りますよう、あなた達の一生が永^{なが}からんことを！」。

（Har.42話 拙訳Ⅲ 164）

ここでは「時」を表すキーワードをいくつか挙げて、概念分析をおこなう。その概念場のなかに多様な「時」の文化的特徴が表出しているからである。その特徴の中には、どの文化圏でも共通した考え方であろうし、アラブ民族としての特徴を浮き彫りにしている概念もあるはずである。四次元の漠然としすぎている「時」であるから、全体像を見通すのは難しかろうが、その一端は開示できるはずである。「瞬時」の〈刹那〉から「歴史」の生めかしい〈世相〉、「永遠」の、有史から無史となる〈神の世界〉に至るまで多様に広がる。ここではその「時」を表す語彙層のなかで「鍵概念」と思われる幾つかを素材にして探ってみることにする。順序として、相対的ではあるがタイムスパンの短い時の用語から始める。タイムスパンの短い語からは以下になるろう。1) 一瞬・瞬間・瞬時、2) 一刻・時間、3) 一日の分割、4) 一週間、一カ月の分割、5) 年・12カ月、6) 時代・世紀などのタイムスパンが長いもの。但し多くの時を表す語彙の中では、その中心的意味から外れて、限定的な意味から中和化されて、単に漠然とした〈時〉が表示されることも多いことを断っておこう。そして日常生活においても、学術世界でも「時の目安の指針」となる一日、一週間、一カ月、季節、一年などの基本概念は述べることで多く、それぞれ一稿を要するため、簡略に記すこととする。本稿ではこれらの時間スパンの中で、短いもの1) 一瞬・瞬間・瞬時、2) 一刻・時間、から順次スパンの長いもので6) 時代・世紀有史から時間を越えた悠久、永遠ないしは来世までを含めたものなどの諸相を第1章で扱う。そして伝統的には時間的基礎概念である「一日」については、

朝、昼、夕などより具体相や属性を第2章以下で述べることにする。

第1-2節 一瞬・瞬間・瞬時

アラビア語では一瞬・瞬間は、例えとして時の推移、目のマバタキ、目蓋の開閉、稲光などを動作主として時の「一瞬」に充てていることが推察できる。また「時間をかける」アラブ的言い回しとして前節の事例2に叙された「サンダルtarfahの鼻緒が結わえられるほどに」、「ラクダの腹帯がきつく締められるほどに」なども興味深い喩えと言えよう。以下では鍵概念となる1) ハール haal、2) タルフア tarfah、3) ラフザ lahzah、4) バルカ barqah を扱う。

1) ハール haal はある「巡り来る状態」を表す基本語である。時とは「一瞬一瞬の巡り、巡環」、これがハールの原義である。日常の挨拶「ご機嫌いかがですか？」kayfa haalu-ka の直義は「あなたの状態はいかがですか？」と聞いているわけであるが、この基本義ハール「状態」、その中身や内実 (sifah) が問われているわけである。さらに狭義にはその変化、推移、移行、経過が問われる。それ故基本的には〈時〉が大きく関与している。ハールとは、「現在の時・一瞬・瞬間」を意味し、過去の終わりで未来の始まりの「一瞬」、「その時」のことである。それ故「あなたのハールはいかがですか」とは厳密に言えば「あなたの現在の瞬間、今、ここでの状態は如何ですか」と尋ねているわけである。同様の意味合いで、ハールは「直ちに、すぐ、ただ今」などの表現として対格にてハーラン haalan とか、時を示す前置詞 fii と共に fii l-haal との言い回しでも現在よく用いられている。「目下のところ、現在は」はハーリー haaliyy と、また「～するや否や」はハーラ・マー haala-maa とも言い表される。「ともかく」の意味でもアラー・クッリ・ハール "alaa kulli haal の言い回しも良く知られているが、原義は「現在 (の時の状態) は如何であれ」である。なお同族語のハウル hawl は権能・権力の意味で知られている「権能も威力も神のみ所持するもの」laa hawla wa-laa quwwah illaa billaahi は人智、人力では及びえない時の言い回しになっている。この意味合いから、時を表すと力強い太陽の周期の状態から「一年、一年のサイクル」の意味を持つ。

2) タルフア tarfah : 「一瞬」を意味するこのタルファと次のラフザは目の視線やまばたきの原義と関連する。タルファ tarfah、この語根動詞は「まばたきする、目をまたたかせる」の意味である。タルファ tarfah は「一瞥、またたき、ウィンク、視線」の具象的意味から、「またたく間」「一瞬」の抽象的な四次元の意味に拡大した。「目のまばたき」を意味する同義語ガムダ ghamdah にも同様な使い方があり。「一瞬」の言い回し、「目を瞬かせるより速く」asra'u min tarfati "ayn は、このタルファ tarfah が採られている。

3) ラフザ lahzah : ラフザ lahzah は「一瞬」の意味として、同じ目であってもまばたきの方ではなく、視線の方から由来する。「視線をチラッと移す」ことである。語根動詞ラハザ lahaza はチラッと「横目で見やる、流し目を送る」である。すなわち「一瞬の視線の移し」から「瞬間」の意味となった。「一瞬にして、間もなく」の意味でフィー・ラフザ fii lahzah と言う。「ちょっと待って！」などの言い回しとしても用いられる。英語の in a minute と同じ用いられ方である。「彼の所にちょっと寄った」jalastu 'inda-hu lahzah のような使い方をする。これと関連するが「目の目蓋 (rimsh)」

が「一瞬」に派生する語を挙げておこう。ラムシャ ramshah がそれであるが、目蓋（rimsh）を閉じて開けるか、目を^{つむ}隠るか隠ら無いか、のわずかな「一瞬」これがラムシャである。

4) バルカ barqah:「稲光、雷光」をバラク baraq と言うのは知られていよう。そのバラクから「一瞬・瞬間」の意味に派生した語もある。バラクがピカッと放ったあの瞬時、あの一閃、これをその派生語バルカ barqah と言う。同じく稲光の「一瞬」から時の「一瞬」の意味に拡大された語にラッフア raffah がある。この語根動詞ラッフア raffa は「稲光がピカッと光る」から由来する。いずれの語も「稲光、雷光」の方から由来してきている。

なお、我が国の「刹那」も一瞬の意味であり、一時的な快楽を求めることを「刹那主義」というが、アラブ世界では「一瞬」とせずに「一日」としてヤウミッヤ yawmiyyah と言う。その日その日を快楽に生きることからそう言われるわけであるが「その日暮らし」の言い回しも含めて彼我の民族観も写し出されている。

第1-3節 一刻・一時・一時間

何時何分何秒と現在の我々は何かに性急に追われている如く「時」を細かく分けて用いているが、近代までは「分」、「秒」の概念は無かった。「何時」は本節の2) サアアの項で述べる。現代日常で用いられる「分」や「秒」は、むしろかつてのアラブ・イスラム科学や数学で用いられて学術用語を流用したと見て良いであろう。一「分」は360度の円周一度を「分割されたもの」の意味でダキーカ daqiqah (pl.daqaq'iq) と、一「秒」はさらに分割した、即ち「二度目」の度数分割なのでサーニヤ thaaniyah (pl.thawaanii) と言っている。欧米の minute、second も同様である。

一刻・時間は、時の属性である〈経過・去来・移動〉の意味主体が「時」となって用語化されているようだ。ここでは1) ワクト waqt、2) サアア saa"ah、3) アーン aan (アワーン awaan) の三種を採りあげる。

1) ワクト waqt (pl. awqaat)

ワクト waqt についてであるが、包括的に用いられ意味は「時、刻限、時間、瞬間、時期」である。こちらは語根動詞ワカタ waqata と関連しており、「(過ぎ去り行く、来たるべき) 時を刻む、時を定める、時を約する」とこの語義が反映されている。「神は礼拝の時を定め給う」 waqata llaahu s-salaatah のような言い回しをする。この動詞の受動形 wuqita は「時が刻まれる、時が定められる、時が約される」と、そして受動分詞 mawquut は「時が定めら、限られ、約束された(もの)」の一般義であるが、「時」の宗教性を明示しており、〈寿命〉、〈最後の時〉、〈終末の時〉、〈復活の時〉、〈最後の審判の時〉と特化した意味になる。この点では、後述する2) サアア saa"ah とも共通する。

派生動詞 waqqata は、他動詞の意味をもっと強める場合に用いられる。以下の事例は対象が〈時〉から〈所〉に転移している。「彼(預言者)はメディナの住民に対してズー・フライファを(メッカ聖域の)境界と定めた」 waqqata li-ahli l-madiinah dhaa hulayfah. 直義は「彼はメディナの住民に対してズー・フライファを時の定めとした」である。ズー・フライファは地名であるので、対象が場所であるから、「メッカ聖域の境界と定めた」となる。カアバ正殿を擁するメッカは街自体が聖域となっており、各地に通ずる街道にはここからはメッカ聖域の境界ですよ、とする地点、ミーカー



図1-2 44話 その夜空



図1-1 焚き火に暖を取る ハリーリー作『マカーマート』第44話のさし絵より

図1-1 シャタウィツヤ（避寒野营地）で暖を取る。冬（シター）の寒さを逃れて来て焚き火で囲んで暖を取りながら座談に入る旅人たち。中央にあり太い幹に小枝を互い違いに伸ばして木に見えるのは焚き火である。幹は火の本体であり小枝に見えるのは火の炎の先端である。原画は色彩があって赤い火焰となっており、外炎はさらに黄金色で縁取りされている。白黒でもそれと分かるが、こんなところにも民族観が現れて面白いところであろう。この絵が夜間であり、テントも張らないのは、野営であり、傍らに樹木があって、さらに上に夜空が描かれているからである。

図1-2はその夜空の拡大図である。残念ながらこの絵自体に剥落した部分が何か所かあり、青色で染められた夜空も右半分が空白になってしまっている。そしてこの夜空が円天井の半分、即ち180度展開されている。もしくは月を中心としてその辺りの天空を描いたものか。中天高く擬人化された月が、そして左手には星が三つ見える。月や星は黄金色で描かれている。月の顔に目と口が書き込まれ、それが逆の上を向いているのは、これから天頂に昇って行くこと、即ち満月であるから夜半前のことを表していよう。

ト「聖域の境界」が定められている。北方に通ずるメッカ・メディナ街道ではズー・フライファとされている。この「メッカ聖域の境界」もワクトから派生したミーカート *miyqaat* と呼ばれる。しかし、ミーカートについては元来ワクトと同様「時」を表し、特化して「何かを行う定められた時」が元にあった。特定時とはイスラム暦の巡礼月の七日目であり、その対象者が〈ハッジ(メッカ巡礼)〉になり、その日までこのミーカート地点に入っていることが決められており、八日目のカアバ参拝につながってゆく〈巡〉の〈礼〉になるわけである。こうして〈時〉だけでなく〈所〉にもまた意味拡大され、「一時」ワクトの派生語ミーカートは「メッカ聖域の境界」として知られるところとなって今日に至っている。〈時〉の方を指示する有名な事例では「三日月は、月（一カ月）のミーカート（何かを行う定められた時⇒新しい月）である」*al-hilaalu miyqaatu sh-shahr* がある。ヒラール *hilaal* は「三日月」として知られている。しかしいずれ時制の「一カ月、今夜は何夜月」の稿のところで述べるが、一カ月を三日ごとの＝三夜ごとに区切る「時制」の表示法があり、このヒラール *hilaal* は「新月」であると同時に「朔日から三日目までの月、朔月から三日月」までを表す語でもある。この辺り纖月を見ればすべて「三日月」と見做すわが国と似た面がある。ただしアラブは「四～六日月」までは別の用語が用意されている。

ワクトから接尾辞を付して時を表す副詞も派生させている。英語の *when* に当たる語の *idhaa* を変化させた形で語尾辞にした *-idhin* を付して *waqta'idhin* とすると「その時、その当時」という副詞を形成する。

なお同義語として稀語となっているが、イッフ *iff* があり、「あの時に」*"alaa iffi dhaalika*, などの語用が現在でも残っている。

2) サーア *saa"ah* (pl. *saa"*, *saa"aah*)

事例 ごく普通の「時間」の意味での用い方：さて夜がそのテント綱を広げ、戸を持つ者すべてがその戸を閉じる頃、長老は辺りに呼びかけた、「さー皆さん、時間 (*saa"ah*)になりましたぞ、お集まりください!」。するとだれもこぞって彼の声に応じて部屋に入ってきた。一同が彼を前にして列を成して座り、証人となる者もそれを必要とする者も一堂に会した時、長老は天球儀を操るに忙しく上方に掲げたり下方に下げたり、日取り暦を手照合したり置いたりしていた。

(Har.29話 拙訳Ⅱ 338)

次にサーア *saa"ah* であるが、「時」という蓋然的な意味合ではなく、時のスパンが短い「時間、刻限」を明示する用語である。一日を朝・夕に12等分して「一時間」として朝12時間、夕12時間、一日は計24時間とされる。これは日月星辰の動きに基づいて計測がなされるのが原則とされるため、「天文時間」サーア・ファラキヤ *saa"ah falakiyyah* と呼ばれる。天文学者や科学者、宗教関係者にはこうしたサーア *saa"ah* 観が必要ではあった。しかし一般庶民の間では一刻を争うような時は必要ではなく、おおよその「時間、刻限」で十分であった。それゆえゆるやかな「時間、刻限、一刻」を示しておれば足りた訳で、その意味で民衆時間、「時の指標となる時間、間に合わせ時間」サーア・ザマーニヤ *saa"ah zamaaniyyah* として日常時間的に用いていた。サーア *saa"ah* 「一時間」の語をサーアタン *saa"atan* と対格にすると、副詞的な比較的長めの「一時、しばらく」の意味となる。普通にはフィイ・サーア *fii saa"ah* と前置詞＋名詞で言うことが多い。「私は彼の許に暫時滞在した」*nazaltu "inda-hu fii saa"ah* という風に。サーアに定冠詞を付すと二様の対応が観られる。アッサーア

ト as-saa"at とすると「その時」の意味だが、固有名詞として The Time すなわち「その時」、「来たるべき時」、「復活」、「最後の審判の時」などを指示する。「その時 近づけり」 iqtabarati as-saa"atu など。これに対して対格アッサーアタ as-saa"ata とすると「ただ今、たった今、すぐ」となり、意味の幅が大いに異なる。「時の薬」 dawaa'u saa"atin とは「すぐに効く薬、即効薬」のことである。

サーア saa"ah は「時間」の意味から具象化して「時計」の意味で用いられる。元々あった日時計は saa"atu sh-shamsiyyah (太陽時計) と言っているし、砂時計は saa"atu r-ramliyyah (砂時計)、現今の腕時計は saa"atu yadawiyyah (手時計) などとしてサーアが用いられている。「時計屋、時計職人」は saa"aatii との派生形を採っている。

エジプト方言などで、「依然として、未だ、なお」の意味でリッサ lissa と言っている。これもサーアから由来しており、「その時に向かって」 li-s-saa"ah が短縮されて方言化されたわけである。

サーア saa"ah の語は語根義とは関連なく、従って「時」の派生の意味場の展開も限られている。動詞が作られる場合は af'ala の語形態がもっとも一般的である。アスワア aswa"a と言うと「時間を作る、過ごす」がその意味となる。しかしそれに加えて、この語の派生形は「時間を作る→時間を遅くする→愚図愚図する」という負の方向に行ってしまった。サーア「時間」を単位として、「時給で契約や雇用をすること・時間雇い」をムサーワア musaawa"ah、そしてその動詞はサーワア saawa"a と言っている。

3) アーン aan、アワーン awaan

現在でもよく用いられる「今」と言う時、アルアーナ al-aana と言うあの「アーン aan」である。他に「今までは、今日までは、現在のところは」などでイラ・ル・アーン ila l-aan とか、「今後は、これから以降は」 ミナ・ル・アーン (ワ・サーイダン) mina l-aan (wa-saa'idan) などの日常表現になっている。「アーン aan」と「アワーン awaan」とは同語根の同義語であるが、後者の方がより古典的である。ともに「時、時期」がその意味である。アーンの時間の長さは、季節も表せば時間や瞬間も表し、タイムスパンは広く採られている。「寒気の時来たれり」 jaa'a awaanu l-bardi、「彼ら我らに和解求めてくれど、今はその時に非ず」 talabuu sulha-naa wa-laata awaanin などと用いる。そして時を示す名詞を対格にして副詞や接続詞に転用するように、上に述べたように副詞「今、ただ今は、現在では」はアーン aan に定冠詞を付して対格にしたアル・アーナ al-aana の形である。一方アワーン awaan も対格にして、こちらは When と同じく「～時」として接続詞に用いられる。「彼が立ち上がった時私は到着した」 wasaltu-hu awaana qaama. 複数形は aawinah、aayinah である。複数形の用例としては「彼は私のところへ時々は来たものである」 ataa-nii aayinatan ba"da aayinatin. また時を表す接尾辞 -idh を付してアワーニズィン awaanidhin と言うと「その時、その折、時節柄」などの意味を表す。

語根動詞アーナ aana < awana は「気楽である／に行く、くつろぐ／いで行く、ゆっくり丁寧である／に行く」を表している関係上、そうした意味合いも持たせた〈時〉に用いられる。派生形アーイン aa'in (pl. awaa'in) は「〈時〉を急がずゆっくりした足取りで行く、行為する、旅する、仕事をおこなうこと」を表す。「ゆるり旅」の用例として「われわれとメッカの間はゆるり旅で三夜(行程)である」 bayna-naa wa-bayna makkata thalaathu layaalin awaa'in、また「四日ごとと給水のゆるり放牧の方が三日ごとと給水の放牧より余程良からまし」 rib'un aa'inun khayrun min ghibbi hashhaasin のよ

うに。この用例の中の「四日ごと給水」 rib"u、「三日ごと給水」 ghibb とは、ラクダ放牧において、ラクダの給水周期ジムウ (jim' 喉の渇き) の用語であり、いずれも給水した日を一日と算定するところからギップ ghibb は中一日置いた「三日ごと給水」、リブウ rib"u は中二日置いた「四日ごと給水」となる。20日までの給水周期があり、夏季が短く、冬季は長くなる。なお筆者は「一日をはみ出すサイクル」、日を超えた周期としてこのラクダ放牧について、拙著『砂漠の文化』の第2章「遊牧民の日常生活」の一項として論究しているので参照されたい。

第1－4節 長いスパンの時 時代、世紀ほか

第3節で述べた時制をさらに長いスパンで観ると「一日」とその分割概念が扱われなければならない。これらは第2章として以降に述べる。

一日を越えた時制としては一カ月を単位とする黄道12宮と「月」、その下位単位である「週」や28星宿がある。これらは別稿「今夜は何夜月」で扱うのでここでは省略する。また「一カ月」を超えた「年」、この下位単位である「季節」も矢張り別稿「年、季節、その節目」で扱うので、ここでは省く。ここで扱う「時制」の用語は長いスパンの時である。「ずーっと」とか「～世紀」、「～時代」「未来永劫」、「悠久」とかを表示するキー・タームである。「天地創造」から「終末」「来世」までも表す宗教とも絡んだ内容も含まれることになる。「瞬間」が「刹那」と世俗、現世を象徴するのと対照的であることが読み取れよう。以下の六種の用語を俎上に載せる。この中でも相対的に短期のものから扱ってゆく。1) ヒーン hiin、2) ザマーン zamaan、3) カルン qarn、4) アスル "aṣr、5) アマド amad、6) ダフル dahr である。この中の4) アスルは「一日の午後」の意味の方が一般であるので、第2章2－5－4の方で言及する。

1) ヒーン hiin (pl. aḥyaan, aḥaayiin) :

このヒーン hiin も時を指示する用語としてはポピュラーである。「ただ今、すぐに」などエジプト方言ではダルヒーン dalhiin といっているが、haadhaa l-hiin (この時) が訛ったものである。また「時々、たまに」などでアフヤーナン aḥyaanan と言うが、これはヒーンの数形形の対格をそのまま副詞に転用したものである。文語では「時々、たまに」は fi l-aḥaayiin と言い表すが、こちらの aḥaayiin も複数であるが、複数の複数、すなわち aḥyaan の複数を表示しているのである。くしくも時の認識がこのような複数に表われているのに興味が注かれる。

ヒーン hiin の指示する時間帯は広い。そのスパンが長くダフル dahr と同義の「時代、世代」から、一時や瞬時の短さも表す。特に循環の意味合いが強く、そのため数値の時間帯もさす。ヒーンには以下のような特殊な意義をも有する。ヒーンが「40年(間)」を意味するのは人生・一生の期間、それが「七年(間)」の意味になるは七曜の支配する年の循環、「二年(間)」、「一年(間)」、「六カ月(間)」、「二カ月(間)」はそれぞれ「一年」および「二年」を周期とする時の目安として状況に応じての特称であろう。

なお「年齢層」とか「世代」の意味でジール jil (pl. ajyaal) が用いられることがある。ヒーンの義と同じく時が「一回転する、一回りする」の jaala < jawala から由来しており、「世代世代に亘って、代々、世々」どの意味で jiilan ba"ada jiilin などとの言い回しでよく用いられる。

副詞的にヒーナン hiinan として「或る時、折々、しばらく」などの意味を持たせている。そし

て対格はそのままヒーナ hiina として時を表す接続詞 when として、「彼が着座した時私も座った」jalastu hiina jalasa のように用いる。また時を指示する接尾辞 -idh を付加して hiinidhin とすると「その折、丁度」などの意味を実現する。反対に接頭辞 ta- を付して tahiina とすると、「その時に非ず」の慣用句として用いられる、「恵む者無き時の恵み深き者たち」al-"aatifuuna tahiina maa min "aatifin のように。この tahiina は普通の解釈では否定の特殊動詞ラータ laata が介在しており、否定詞 laa と -ta とに分かたれ、後者が hiin に接頭したものとされている。laata とする否定動詞はライサ laysa と姉妹語であるが、もっと特殊であり、一切活用はしない、すなわち三人称・単数・男性形でしか用いられない。しかも〈時〉の場合しか用いられない。『コーラン』の中の有名な聖句「だがそれは脱出の時ではなかった」wa-laata hiina manaasin (38章3節) があるし、「後悔する時ではなかった」laata saa"ata mandamin など。

「時」を指示する用語ヒーン hiin をさらに個化する接尾辞 -ah を付加してヒーナ hiinah とすると「ラクダの搾乳時」という用語となる。遊牧民の間ではごく普通に言われるヒーナ hiinah 「ラクダの搾乳時」、「あんたの雌ラクダのヒーナ (ラクダの搾乳時) は何時だ?」mataa hiinatu naaqati-ka などのように。ラクダの搾乳は放牧に出かける前の早朝と、帰って来て給水を終えた後の夕方の二回が普通であるが、日帰り遊牧が常態ではないし、乳の出の状態によって、ハループ (haluub) のように〈乳用ラクダ〉と育成された雌ラクダは、多量に出す場合は日に四回も絞られることもあり、また孕みラクダや身体的欠陥を持つラクダは乳量が少なく一回の場合も多いし、様子見のため絞られない場合もある。それ故「彼女 (あの雌ラクダ) のヒーナは何時でした?」mataa hiinatu-haa などの言い回しが急な客の来訪時やミルクを搾りたい時に家族や近隣のあいだで遣り取りが交わされる。また日に一回の搾乳の場合、ワジュバ wajbah と言われることがある。人間の「一日一食主義」のことをワジュバといっている。貧窮のためや、自己に抑制を強いている場合、清貧で敬虔な生活を送っている場合など「日に一度の食事しか取らない、一日一食」のことからの流用である。ヒーナとの関連から「一日一回の搾乳」は tahniin とも呼ばれている。「ラクダの搾乳時を定める」ことをもタフニーン tahniin と言い、この動詞は hayyana で指示させる。通常ならば搾乳状況や体調などから今日明日ぐらいの搾乳時間は定めておく。今日は朝は何時、夕べは何時、また明日は…などと、それによって放牧時まで定まってくるわけである。他の派生形 ahyana は「その時間帯に入る、活動する」であるが、ahyanati l-ibilu 「ラクダたち、その時間帯に入る」とは、〈搾乳時〉ならば搾乳時に入ること、また〈旅〉ならば旅装・荷装を整えることに、〈放牧〉ならばラクダたちが一か所に集めらることを言っている。ラクダ乳への依存度が推し^{はか}測れよう。

ヒーン hiin の語根は $\sqrt{H/Y/N}$ であり、それから動詞 haana < hayana が形成され、「時が来る、近づく、間近である」の意味となり、アーン aan の動詞アーナ aana と同じ様に用いられる。「彼にはなすべき時が来た」haana la-hu an yaf'ala のように言いまわす。派生動詞ハッヤナ hayyana は他動詞であり「時を宛てる、時を定める」であり、「王は客達の来訪の時を指定した」hayyana l-maliku duyuufa-hu のように用いる。なお他の派生形 ahaana も同様である。

また「時を待つ」という派生形もあり、これは tahayyana とか istahaana としている。「食事時を待つ」tahhayana t-ta"aama のように用いる。イフタル (断食明けの食事) との関連から断食月の夕刻にはよく聞かれる言葉である。他の派生形ハイン hayn は「定められた時」、すなわち「個人に生きる時間を決められた時」、「寿命、死」を意味する。

「人を雇うに決められた時間で雇う、時間限定雇用」のことをムハーヤナ muḥaayanah と言っている。同じく「時間」saa"ah の派生形 musaawamah と同義となる。

他の派生形 aḥaana は「その時間帯に入る、活動する」であるが、ヒーン hiin そのものがタイムスパンが長い、その時間帯もずいぶん長く、大凡はこれから述べるザマーンと同じぐらい月、季節、年などが想定されている。

2) ザマーン zamaan (pl. azmun, azminah) :

このザマーン zamaan は「時」の代表語の一つである。ザマーンは短い時を指す場合もあるが、一般には「時候」、「季節」、「時代」、「治世」と言うように一区切りが長い時間帯を言う。同義語にはダフル dahr とかアスル "aṣr またヒーン hiin がある。一年12カ月を分ける概念として、二カ月ずつを言い表す言い方があり、現在用いられている月名にもその残存が読み取れるが、その二カ月毎をザマーンと言い表しもしている（別稿を参照）。ザマーン zamaan の複数形は azmun および azminah であり、形態的には少数複数形である。複数形の azminah には、その語それ自体で「四季、季節」の意味を持たせている。「私は三季まえに彼と旅をした」safartu ma"a-hu mudh thalaathatu azminah のように。

なお四季などの「季節」を表わす日常語は現在ではファスル (faṣl pl. faṣuul) 及びマウスィム (mawsim pl. mawaasim) が知られるが、前者は「区切り、節目」を意味する一般語から、及び後者は「季節の風」を原義として拡大したものである。後者の「季節風」のマウスィムはモンスーン monsoon の語源でもあり、重要語である。マウスィムに関しては別稿「遊我民のカレンダー、星の暦」の中で、「2-2 風と歳時」の項のところで詳しく触れている。

副詞的用法ザマナーン zamaanan とは「しばらくの間」であるが長いしばらくであり、日常語でも「ずっと昔、はるか以前」など過去の時に用いられることが多い。他の時制用語の副詞的用法よりも〈時のスパン〉が長い意識が働いていることになる。このザマーンには指小辞が用意されておりズマイン zumayn である。長い期間であるが、ザマーン程ではないニュアンスで、「私は左程長くはない以前に彼に会ったことがある」laqiytu-hu dhaata z-zumayn のように用いられる。また「長らくの、長く続く」の意を表わすムズミン muzmin の形容語もあり、「長患い」maradun muzmin のような使われ方をする。

ザマーンは同義語としてザマン zaman がある。これは長母音を短縮化しただけの語であるが、やはりよく用いられているようで、ザマンの複数形は azmaan とされている。

ザマーンの語根義は「時」とは関与しない。そのため、azmana の形で派生動詞化されて「ザマーンの時間帯に入る、行う、留まる、続ける」などの意味を担う。「彼はしばしメッカに留まった」azmana bi-makkah、「彼からの贈答品は大分遅く私の許に届いた」azmana "annii "ataa'u-hu、直訳は「彼の贈答品は私から長い間留まっていた（届かなかった）」である。

「ザマーン互いに近くなれば、ムウミンの夢見ほとんど裏切ること無し」idhaa taqaaraba z-zamaanu lam takad ru'ya l-mu'mini takdhib とはハディースからの言い回しであるが、ザマーンとはこの場合、時の長めの指標、一年のウクダ ("uqdaḥ 結節点)、即ち四季の分点 (春分・秋分)、至点 (夏至・冬至) のこと。ザマーンが互いに近くなる (= 順調に楽しく過ごす) と「時」は短く感じられる。一年が四季の「分点・至点」の一つ一つの節目ウクダ (三カ月単位) に達することの何と速いこと。同じ



図2-3 同じく夜空



図2-2 夜空の拡大図



図2-1 野営での洩れ話 ハリーリー作『マカーマート』第4話のさし絵より

図2-1 野営地での洩れ話
左隅の二人は親子。木にもたれて子に向かって指差しながら世渡りの術を説き聞かす父親。神妙に聞き入る髭も生えていない若い息子。近くにいて二人のやり取りを洩れ聞く旅の同行者。右手には騎乗してきた四頭のラクダ達が座り込み、奥には馬が振り返っている。馬にはイラークと呼ばれる餌袋が頭に吊るされている。すべてが親子の方の視線をやり、全体の集中性を高めている。樹上には鳥が二羽ねぐら峙はとしている。夜空には月と星が。

図2-2は夜空の拡大図。満月が中天に存在感を示して、真正面を向く。擬人化されているから、まさに夜空の天頂にあって地上を見守るものと思われる。その周囲には左に五つ、右に六つ、月の下に一つの計12の星が配されている。

図2-3は同じマカーマートの中の図であるが、参考までに挙げたものである。月が中央近くに、そしてその周辺に星々を配する構図は同じであるが、夜空全体の描き方が逆であり、興味深い。今までの夜空図は天界の頂点から地上を包み込む形であった。しかしこの図の夜空はこれから天球が広がる描き方である。何故このように理由づけするかと言うと、夜空の月は三日月である。三日月は一か月の始め1-3夜月と月末の26~28夜月に見られるわけであるが、天頂で目にはすることは無い。すなわち月初めには夕闇の西空に、月末には明け方東空に低く視認出来るだけであるから。月初めの三日月はすぐ西没してしまうし、月末の三日月はすぐ後に昇って来る太陽の陽光のために消えてしまうからである。従って普通に理解すれば、この絵は西の端に沈みかける月を描き天空はその左上方に大きく広がっていることになる。

くその「点」が一カ月に、一カ月が一週間に、一週間が一日に、一日が一時間に、ことほど左様に短く感じられることをいっている。帰結節の、ムウミンとは単なるムスリム(形式的信者)ではなく、真に神を信じて、その教えに従って真摯に生きる信者のこと。こうしたザマーンの折に見た夢は正夢となって、ほとんど裏切ることはない、との教え。第8宮人馬宮が終り第9宮を迎える。9月21日頃ヤギ座磨羯宮が太陽とともに昇る秋分点の頃収穫期を迎えるので、ルウヤー(夢見)は特に重視される。夢判断 ru'yaa の盛んなアラブであるが、ムウミンであればあるほど聖者同様正夢を見るとの信仰から由来する。

3) カルン qarn (pl. aqraan, quruun) :

よく歴史記述において「～世紀」においての表記にカルン qarn が用いられてお馴染みである。およそ100年 (mi'at "aam) 間を目安にして用語となった。しかし語根/Q/R/Nは元来〈時〉を指標とする意味はなく、他のものが常に意識される〈相互・比較〉関係を言い、二つのものを並べたり、同時に行ったりすることを表す。それ故カルン qarn は「同時代」が語根に近い意味である。従って「同時代人」の意味もまたこの語 qarn の中に持っている。「同時代」、それが中和化されて「世紀」の意味として用語化されたわけである。また「～時代」としてアスル "asr も汎用される。アスルの他の派生形「同時代人」としてムアースィル mu"aaṣir も良く用いられる。これについては、「asr と言えば「午後、夕方」の意味の方が日常的には用いられる。「午後の礼拝」もサラート・アスル salaat al-"asr としてご存知であろう。この語については後述する一日の「午後」の時間帯の項で言及しよう。

4) アマド amad (pl. aamaad) :

このアマド amad も次のダフル同様スケールの大きく長い時間帯を表す。アマドやダフルは神の創造、始原や終末、有史、現世や来世 ("aalamiin) など時が宗教・神学と関わる場合に多く用いられるからである。しかしアマドは相対的にダフル程は長くなく、時のスパンは短いとされる。と言うのもダフルは「創造の時」とか「有史以前」とかの始源の時も包含されるのに対して、アマドの方は過去は不問であって、現在から観て今後の「時の果て」とか「未来永劫」の方が指示されるからである。アマドは従って時は常に前方に、未来の方に働く。「果て無い時」「悠久の時」amadun ma'muudun、とか、副詞的に「永遠に、ずっと」"ala l-amadi などのように。従って二次的に有限の、その限りまで「極限、(時の) 果て、限度いっぱい」の意味派生がある。この意味から「人の一生、生涯」の意味にもなる。なおアマドと同義で語形態も類似しているアバド (abad) とサマド (ṣamad) があり、日常でもまた人名にもよく使われる言葉である。いずれも「不倒、不滅、果て無し」などの否定要素を意味素に加えて、「永久、悠久、永遠」を表わしている。

5) ダフル dahr (pl. adhūr, duhuur) :

時の中でも最も長いタイムスパンを表す。「有史以前より未来永劫」。「時」を表す語彙のなかでは最も長い時間を指す。それも「有史以前より未来永劫」さらに「現世・来世」までをも含んだ意味を持つ。と言うことは、こうした表現自体が、神話や民話、説話や伝承など宗教的信念とか民間信念など、「神の存在」、「神の常在」などのなんらかの歴史を対立概念とする特殊信念を表す場合

が多い。「天地開闢において」 fii awwali d-dahri、「アッラーは未来永劫に留まり給う」 yabqaa llaahu d-dahra などの用い方がされる。アバド abad やヒーン hiin にもこの意味の長い時間帯を指し、ダフルと同義語とされ用いられる場合もある。後者ヒーンはダフルの一部を指して用いられることも多い。「悠久の一時」 hiinun mina d-dahri (『コーラン』第76章第1節)。またザマーン zamaan も長い時間帯を表しているが、こちらは過去中心であり、〈未来永劫〉までの意味を含んではないとされる。ともかく他の「時」の用語より長いスパンの意識が働く用語である。

ダフルは広義には「比較的長い時、時間帯」とされる。「人の生涯」 dahr l-insaan、「彼には長い間が過ぎ去った」 madaa "alay-hi dahrin とか、「それは(天地創造の) 天空(の創造)の時であった」 kaana dhaalika dahra s-samaa'i、「この放牧地は長い間われわれを満足させてくれた」 haadha l-mar"aa yakfii-naa dahrin の用例のように、短期間ではなくたつぷりと、とか予想以上に、とかの〈長時間〉の意味合いが窺える。

ダフルはまた同じ「時」であっても漠然としたものより、もっと具象化した「天変地異」、「有為転変」や「運・不運の時」、「運命」などの意味をも包含している。こうした背景から「時(=命運) 決めるもの」との意味合いもあって、『コーラン』第76章では ad-Dahr がその章名となっており、人間の「時」、天国や地獄の来世観が扱われる。「(人間の) 時(=運、世の浮き沈み)を難ずる勿れ、まこと時(決める)、それはアッラーなれば」 laa tasubbu d-dahra fa-inna d-dahra huwa llaahu. などのように。

ダフルの形容名詞ダフリー dahriyy と言うと「唯物論者」(mulhid とom言う)を指す。反語的ではあるが、ダフリー(唯物論者)は〈dahr〉は未来永劫まで続くとしたら、終末も復活も最後の審判も、来世もないはずと主張する。ダフルは長いスパンの時を表示する故に、このような現世と来世("aalamiin)の〈時〉の概念を考えさせる論議を展開した。イスラム初期から議論された主題であった。

ダフルを能動分詞の語形ダーヒル daahir にすると〈時〉の「とてつもなく長い、果てしない」形容となる。「悠久の時、永遠の時」 dahrin daahirun のように同族語が連接される。派生形容詞のダヒール dahiir にも同様な意味がある。派生形ムダーハラ mudaaharah とは「長期の契約を結ぶ、長期間の雇用を行う」の意味となり、その動詞は daahara である。

ダフルには二種の複数形があり、少数形は adhur、多数形は duhuur である。なお複数に関してだが、他に dahaariir なる特殊な複数形がある。この dahaariir との語形態は複数の複数を表すはずなのであるが、どういう認識が働いているのであろうか。ダフルには「時」=「運」の意味があったが、その「運」が悪い方に働いて、dahaariir なる複数形は、「不運、厄害」の意味を担っている。「彼は不運に陥ってしまった」 waqa" a fi d- dahaariir とか、「まことこの世は巡り合わせで(悪しく)災難が続くものだ」 inna dha d-dahra atwaaran dahaariiru、あるいは「忌まわしい時代」 dahrin dahaariirun のように用いられる。これを裏付けるようにダフル dahr の語根動詞 dahara には「時が起こる、生ずる、降りる」の語義を表し、その〈時〉とは良い意味よりもむしろ悪い方の不運とか災害とか悪い事態とかのことを指す方が多い。矢張り「終末」とか「審判」、「来世」とがこのダフルには絡^{から}んでいるからであらうか。

第2章 一日とは

第2-1節 一日の概念

アラブ世界は、いまでは太陽暦、西洋暦が普通に用いられているが、しかし現在でも陰暦のイス

ラム暦に基づく場合は、一日の始まりは日没の時とされており、宗教行事や祭事にはその日にちに準拠している。ここではアラブ基層文化を追求する関係上、陰暦及び月星の「星暦」に基づく伝統的概念を探ってみる。アラブ伝統社会では一日を円の循環として把握して、その円を二分する概念、一日を四分する概念が知られている。一日を二分する概念では「日の出」と「日没」とを東西として水平に「昼／夜」を二分割する、また「正午」と「夜半」とを縦軸に「朝／夕」を分ける捉え方、概念である。そして、「昼／夜」と「朝／夕」の概念範囲を交差させて四軸・四枠として四分割で捉えられていたことが知られる。恐らくこれはどの文化圏でも共通していよう。アラブ伝統社会では陰暦であるため、第一分割目を「日没」から始まって「夜半」までの時間帯、第二分割目を「夜半」から始まって「日の出」までの時間帯、第三分割目を「日の出」から始まって「正午」までの時間帯、そして最後の第四分割目は「正午」から「日没」までの時間帯、としており、こうした記述も散見される。この章では図3を参照しながら読み進んで頂きたい。

こうした「日没」、「夜半」、「日の出」、「正午」の四分割の時間軸、「朝／夕」、「昼／夜」の時間帯を手掛かりに、アラブの「時制」の基層概念を探っていくて観よう。まず一日の概念を、次に一日を四分割した概念を扱う。後者は四分の中の、正午及び夜半（＝南北）を縦軸として交わる「朝」と「夕」と、「昼／夜」（＝東西）の横軸のうち「昼」の部分、第三、第四分割の部分、平たく言えば「昼」の世界の概念を探っていく。そして「日の出」から「正午」まで、「正午」から「日没」までの、時間概念にどのようなものがあるかを考察する。日課（仕事、食事など）が時刻と関与していることが推察されようし、礼拝時も時の定めがあること、犠牲祭 "iid al-adhaa の犠牲 adhaa がドウハー duhaa（昼前）の語と関与していたり、ハッジ（メッカ巡礼）行が矢張り日時、特に「時」の「巡」定めがあること、など文化的事項にも大きく説明が及ぼう。なおここでは、四分割のなかの第一、第二分割、すなわち夜間の世界は扱わない。この夜間の概念については、すでに述べたように以下に記す拙稿があるからであり本稿は、その続編に当たることになる。その前稿では、アラブ民族の伝統的「時制」と文化的事項を論じたもの。夜の活動として、睡眠観、夜の礼拝行、夜と睡眠、昼寝との相関。一日、及び夜間の時間分割概念、五更概念、天体の月、月光についての概念、三日月と月見を中心にした民族概念を追求した。本稿はその続編なので、初めに記した前稿も参照されたい。

さてそれではヤウム yawm 「一日」についての概念を観てみよう。

アラブ世界ではよく使われる「一日」の用語にヤウム yawm がある。「24時間の時、一日」を表す代表語はヤウム yawm である。そして一日が大別される場合、二分されて、昼 nahaar と夜 layl とに分割されていることはアラブも同じである。しかし「一日」を表示するヤウム yawm が時には狭められて「昼」 nahaar の意味にも用いられることがあるし、逆に昼の語 nahaar が拡大されてヤウム yawm 「一日」と同義で用いられることもある。

一方では一日を四分する考えもあり、上に加えて朝 (sabaah) と夕 (masaa') とが加わる。朝は夜半から始まり、夕は午後から始まる。この概念は挨拶からも推断できよう。夜半過ぎからの挨拶は「良い朝を！」 sabaahu l-khayr であり、正午過ぎからの挨拶は「良き夕べを！」 massa'u l-khayr である。四分の場合、どこを第一分にするか、もちろん陰暦であるので日没から夜半までである。従って日の出から正午までは第三分目ということになる。

いずこの文化圏も時制の分節する用語の中で「一日」を表すのは基礎語となっていよう。アラ

ピア語でもヤウム yawm は基礎語であり、それ自体語根をなす。定冠詞を付けて al-yawm と言うと「今日」の意味となる。ヤウム yawm を副詞形にして yawman と言うと「或る日、かつて」となるし、fa-（それから）という接続詞で重ねて yawman fa-yawman とは「来る日も来る日も」となる。kull（度毎 every）を前置して kulla yawmin とすると「毎日」、時を表示する小辞 'idh を後接させて yawma'idhin とすると「その日には」と言う副詞になる。また漠然性を表示する後置詞 maa yawman maa は「或る日、いつか、かつて、来たるべき日に」の意味になる。比較形容詞 aywam 「より一日的な／らしい」と言う「明るく輝かしい」と、「重大な、厄介な、記憶さるべき」との両義がある。前者は「昼」nahaar の属性である明るさ、輝しさと関連しようし、後者は後で述べるヤウム yawm に「異常な特別な時、戦い」の派生義があり、その関連であろう。

従って語根 Y/W/M そのものが「一日」を表し、派生形はすべて「一日」を含んだ何らかの意味の広がりを展開している。動詞 yaama < yawama は「一日を過ごす、一日の営為を行う」であり、yaawama と派生させると「一日契約を結ぶ、日雇いで雇う」となる。派生名詞 yawmiyyah は「一日に関するもの、日記」あるいは「日銭、日給」の意味となる。

なおヤウム yawm の複数は ayyaam、および ayaawiim である。複数の前者アッヤーム ayyaam もまた歴史書、文学書などでよく用いられる語である。というのもヤウム yawm には特化した「異常な特別な日、戦いの日」と言う意味にも用いられるからである。「バドルの戦い」も Yawm Badr と言われているのはで存知であろう。部族戦争であるハルブ (harb) や敵部族に対する襲撃ガズワ (ghazwah) など、大掛りな戦闘のあった場合すべて「～～の戦い」と言う代わりに「～～の日」と語られ、記される。単独ならば yawm～～と、一日では終わらない戦いならば ayyaam～～と言う形式で当時者の脳裏に刻まれ伝承される。プレイスラム期からの部族戦争や襲撃で主立ったものは、それぞれの部族の誇りや品格表示の遺産となって、詩に謳われ口頭伝承で継承されていた。それらがやがてイラスム期以降口承から書き写され、歴史書や文学書のエピソードを多様に彩っていく。アッヤーム・アラブ Ayyaam al-"Arab がそれらであり「アラブの戦史、部族闘争史」として知られている。それぞれの部族のアンサーブ（系譜）とも絡んで多彩に展開された。

アッヤームに関連して興味深いのは「一日の息子」という言い方があり、「一日」が単数か複数かによって、意味が反対になってしまう語法がある。単数で「一日の息子」ibn al-yawm と言うと「その日暮らしの人」であるのに対して、ibn al-ayyaam すなわち「日々の息子」と言う、「学識・知見・経験豊かな人物」、「かつての知識経験を体現した人」の意味で用いられることである。後者には「特別な日」の連続のイメージが結びついていよう。

第2-2節 「昼」の概括 用語ナハール

一日は昼と夜に分けられる。アラブ・イスラム世界ではイスラム暦もそうであるが、陰暦においては、昼が明けるのは「日の出」shuruuq からではなく、「夜明け」fajr からである。昼間は午前と午後に大別できようが、本稿では日の出、朝、午前、正午・真昼、午後、日没の順で扱う。昼については、さまざまな次元において、やはり太陽の位置、太陽の色、陽射しの強さ、陽射しの影などがその時制の指標となっている。第3章では陽射しのことを述べるが、陽射しにしてもガゼーラ ghazaalah という語があり、この語は「太陽」の同義語の一つである。但し朝・午前の「昇る太陽・朝日」の限定された意味であって、「入日・夕日」を指しては用いない。後者は jawnah と言ってガ

ザーラ（ghazaalah）の対義語となっている。

一日が昼と夜とに分割されていることはアラブも同じである。興味深いことに、我が国の「昼も夜も、昼夜」と言う言い回しをアラブは laylan wa-nahaaran とする。字義通りには「夜も昼も」であり逆の表現となっている。夜の方に比重があるアラブ文化の特徴が出ていよう。夜がライル layl というのに対して昼はナハール nahaar が代表語となっている。昼はやはり太陽の領す世界、やはり昼は太陽の位置や明るさ（白、黄色、黄金色、赤など）、輝かしさや陽射しの強さが時間帯の指標となろう。しかし時間帯の指標として意外と多いのは、日影なのである、陽光が投げかける〈影 zill〉なのだ。影の長さがどのくらいかによって、時間帯を知る手がかりを与えていることだ、「日時計」もそうのように。何よりも太陽が常時出ている乾燥世界を反映していよう。以下に三例「昼」が描かれている文学作品から引用しておこう。

事例1：アッラーに讃えあれ！ 栄光ある王に、愛される主に、生まれ来るすべてに形与える方に、見捨てられるすべての者に避難所となられる方に、大地を延べ給う方、山々を（大地の）杭とされた方、降雨もたらす方、難事も平易くし給う方、どんな秘密もその行き着く先もお見通しの方、どんな権力者をも失脚させ破滅させるお方、夜を昼に継がせそれを繰り返すお方、物事を発意しそれを実現されるお方、その恵み遍くして完璧なお方、その雨雲降雨もたらし大地に降り注ぐ、求めや願いを叶えて下さり、貧窮者や寡婦に手を差し延べ給うお方に！

（Har.29話 拙訳II 339-40 原文247）

「夜を昼に継がせ」の原文 mukawwiru d-dahuur はターバンを捲く（kawwarka）ように夜を昼に継いで連続させること。dahuur は前節1-4-5で述べた「長い時」を意味するダフルの複数である。ここではダフルに「昼と夜」の意味を持たせ、押韻の関係で選ばれている。

事例2：

巡礼とは「夜昼重ねて急ぎ旅するもの」に非ず

またラクダや乗り駕籠を選び好みするものに非ず

己をむき出しにして聖なる家（＝カアバ正殿）目指すもの

無為にそこで数日間過ごせば足りると言うに非ず

正道の背上を乗り物として行くもの

世上の欲望押さえるを導きとして 真理を進むべき道として

（Har.31話 拙訳II 386 原文227）

「夜昼重ねて急ぎ旅するもの」 sayru-ka ta'wiiban wa-idlaajan のタウウィーブ ta'wiib とは「昼旅」として、より具体的には昼を中心として「一日中歩くこと」を、またイドウラージュ idlaaj とは「夜旅」として、具体的には「ドウルジャ（daljah）の頃合いに旅立つこと」を言う。ドウルジャは夜間の中でも深夜過ぎから夜明前までの「後半夜」を指す用語である。イドウラージュは夜旅（israa'）の中でも「夜遅く、後半夜に旅立つ」ことで、いずれも旅（sayr）の中でも「急ぎ旅」を共示している。

事例3：その場所を立ち去ろうにも、わしの足は言うことを聞かないし、飢えから苦痛は刺す程に痛む。それでも（ようやくのこと、食欲）への執着とそれへの激しい衝動が、また飢えとそれへの痛みが、（わしを突き動かして）あてどなく迷わせ、少量の水なりとも満足しようと水場を求め歩いた。丸一日というもの、ありとあらゆる川に皮バケツを投げては引き上げてみた。けれども、

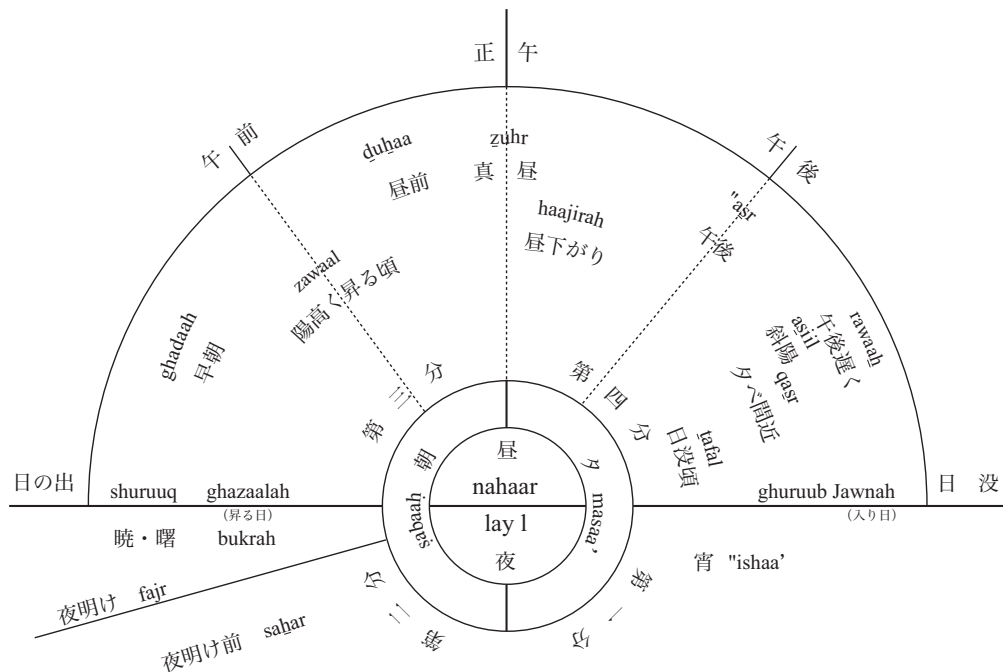


図3 昼の時間（分割）概念

（引き上げられた）皮バケツの中には一滴の水もなかった。渴きを癒すことなど論外である。（こんな状態のまま）遂には太陽は西に傾き、わしの心は徒労も手伝ってか衰弱しきってしまった。

（Har.15話拙訳Ⅱ 11）

引用文の中で、「丸一日というもの」の原語 *sahaabata dhaalika n-nahaari* は「その昼の雲（の間）」が直義である。もともとは *sahaabah* は「雲」である。ここでは用法として日中が雲で覆われている折に言われたものだが、やがて「雲」が「～の間中」の意味で一般的に用いられるようになった。即ち *tuula*（～の間、～の間中）という前置詞と同義である。「その日の昼の間中」ここでは「一日」が「昼」の代表語 *nahaar* で表されている。

昼の代表語ナハール *nahaar* の語根義は〈昼〉や〈時〉とは無関係な、むしろ *nahr*（川）の方がそれを反映している。「水や液体が流れる」であり、その具象がナフル（川）である。恐らくナフルからナハールから派生して〈水や液体〉から、より抽象的な〈時〉に転じて時の流れから「昼」の意味を獲得したものと思われる。

従がって基本動詞には〈昼〉や〈時〉の意味素は見られず、こうした例に違わず動詞にその意味素を反映させるのは派生動詞Ⅳ型においてである。Ⅳ型動詞アンハラ *anhara* に初めて〈昼〉の意味素が開花する。「昼に入る、突入する、日中に～する」などの語義となる。

昼 *nahaar* の語を元にアンハル *anhar* と比較形容詞にすると、昼の属性である「より明るい、より輝かしい」の意味になる。明るさ、輝かしさが昼の特徴と言えよう。従って「光り輝く、燦然とした昼」と言う場合同族語でナハール・アンハル *nahaarun anhar* と言い表す。昼の語 *nahaar* を形容名詞にしてナハーリー *nahaarii* と言うと「昼の、昼的な（もの）」が原義であり、「昼に食べるもの」となり、もっと具象的に「昼の始めに食べる食料」の意味となり、昼のスパンが朝の方に持って行

かれている。今風のランチといったところか。

昼の語 *nahaar* も複数が幾つかある。少数複数形は *anhur*、または *anhirah* であり、多数複数形は *nuhur* である。

第2-3節 昼の前半 朝・午前 第三分

朝・午前に関しては、一日の概念のところで述べた如く、アラブ民族は一日を二分する場合昼と夜と、そして昼を二分する場合朝夕とする。後者は正午と夜半まで拡大して、同じく一日を二分するかたちになる。この意味で四分する場合午前は「第3分」と言われる。一日を四分 (*rub*) する概念が根付いており、大凡ではあるが「一日の四半」の第一分目を日没から夜半まで、第二分目を夜半から日の出まで、第三分目を日の出から正午まで、第四分目を正午から日没までとする。

わが国の朝・午前は、上の指標からすると「一日の四半」では第三分目にあたり、また昼を二分する場合朝夕の前者ということになる。「朝・午前」の代表語はサバーフ *sabaah* と言う。広義には夜半から正午までを意味する。従って「お早うございます!」の挨拶サバーフ・ハイル *sabaahu l-khayr* (良き朝を!) は、夜間は深夜過ぎから用いられることになる。かつてはイム・サバーハン "im *sabaahan* (朝を快適に送りなさい=送りますよう!) との挨拶もあった。ジャーヒリーヤ時代では、後者の方が一般であった。また名詞「朝」*sabaah* は対格 *sabaahan* にして副詞的に流用されるが、より副詞的に強調するために前接語 *dhaa* (～の所有者 *dhuu* の対格) を付してザー・サバーヒン *dhaa sabaahin* とする。「ある朝のこと私は彼と会った」*laqiyyu-hu dhaa sabaahin* のように用いられる。興味深いのは「朝に夕に、朝な夕な」と言いまわすとき、普通にはサバーハン・ワ・マサーアン *sabaahan wa-masaa'an* と言うのであるが、頻用するために、サバーハ・マサーア *sabaaha masaa'a* と破格的に略して、連語熟語として用いられる。同語形態で同形韻となるため、この方が口につきやすいこともあろう。さらに興味深い事例は「朝だぞー!」*yaa sabaahaah* との呼び掛け、叫びである。起床を呼びかける声と受け取れそうである。が、絶叫した場合、悲鳴的に叫んだり、叫ばれたりした場合は如何であろうか。「敵だ!」、この叫びは「起きて戦え!」、「助けてくれ!」の意味になる。すなわち眠りの床についている時に、不慮の事態に陥ったり不意の敵方の奇襲にあった場合の、近隣の同朋に知らせる叫びとなっているのだ。アラブは直接的に「助けを乞う」表現はしないのである。アラブ諸部族の慣習として、戦闘や襲撃は夜間に行ってはならないことになっている。そのためもっとも狙われる時間帯は、夜間に入る夕間暮れ (=夕紛れ)、行為者が暗闇で紛れて、誰と同意できない (誰ぞ彼^た = 黄昏^{かれ}) 時である。あるいは夜間が終わろうとする明け方、払暁の、朝紛れの頃合いであった。完全に夜間に入る前に、終わる直前に奇襲をかけるのだ。この刻限ならば、奇襲しても言い訳が立つわけである。夕間暮れ時は、その後真っ暗になってしまい、敵味方の区別や地理地形が不案内となるため、朝方の奇襲が常態化した。これが「朝 (だぞー) の日」ヤウム・サバーフ *yawm al-sabaah* と言われる。「奇襲の日」の意味である。

「朝」*sabaah*、この用語は時制の一つの基礎語であり、「夕」のマサーウ *masaa'* と対になる。「朝」の基礎語であるだけに、語根 $\sqrt{S/B/H}$ からしてすべて〈朝〉の意味が関与する。他の派生形スブフ *subh* は「朝」であっても、もう少し早い時期に特化して「夜明け、朝ぼらけ、昼の始まり」、ファジュール *fajr* とかブクラ *bukrah* と同義となる。スブフを「夜明け」の意味に特化して「夜明けの母」*ummu subh* という言い回しがある。一日の活動の始まり、と捉える。と同時にイスラム世界はここ

から昼の一日が始まる、すべてが始原する。このことから、「メッカ」の異称となつていているところは面白い。起床して最初の行為が「早朝の礼拝」であつて、信徒すべてがメッカの方角を向いてその日の加護をアッラーに祈るからである、「朝一番に」。

このスプフを女性化したスプハ subhah およびサブハ sabḥah とすると、「朝寝」となり、贅沢性、富裕性を指しており、謹厳実直なムスリムは「日課を果たすべき、日を稼ぐべき、労働すべき時間帯」であり、それを「朝寝」で過ごすことはマクルーフ（推奨されない行為）という考えを持っている。スプハする者はまさに「穀潰し」に当たるわけである。しかし派生動詞 taṣabbaha が「朝寝する」とあるように、夜旅をする者や夜勤の者などは日常の一部であり、さらに分限者などプレイスラム期の名立たる著名人や、イスラム期のカリフや支配階級・富裕層の中にはマクルーフとは無関係にふるまっていた。さらに「朝酒 sabuuh」も重層する。

事例：すると突然、我々の前に一人の男が蹶れた。みすばらしい衣服を身につけ、びっこをひいて歩いてきた。彼は（我々に向かって）語りかけた、「高貴で善良な皆様方、親切を無上の喜びとする皆様方、今朝 (sabaah) も健康であられますよう！ 朝の一飲み (istibaah) もまた気持ちいいものでございましょう！ ですが（皆様）ご覧下さい、かつては宴や祝儀を催し、寛大であり裕富でもあり、土地や村をも所有し、（客には）もの惜しみなく馳走を振舞っていたこの男をご覧いただきとうございます。（かつてはこれ程であった男にも、一旦運に見放されると後は急転直下）さまざまな厄害はそのしかめ面をこの男から外すことはありませんでした。悲しみは次々と襲ってくるし、（私に）恨みを持つ者の悪巧みのとぼつちりは受けてしまうし、暗い出来事は重なるばかり！

(Har. 3話 拙訳 I 126)

引用文中「朝の一飲み」、原語は istibaah で「朝・午前中に軽い飲物、ミルク、ブドウ酒などを飲む」という動詞の動名詞形である。前節での脚韻 sabaah と合わせるためにこの動名詞形を用いているが、より一般的には他の派生形サブーフ sabuuh が名詞「朝の一飲み」として広く用いられている。アラビア語には、一日の間のさまざまな時間帯に「飲む」という行為を表す語彙が豊富にある。いわば「一服」と理解してよい。sabuuh が「朝・午前の一飲み」だとすれば、一日の時間帯で、それ以前の「夜明けの一飲み」は jaashiriyyah、「昼の一飲み」は qayl、「夕方の一飲み」は ghabuuq、「夜間の一飲み」は fahmah という具合である。「飲む」実体が〈水〉から〈ミルク〉に、さらに〈酒〉に代り、「朝酒」となることは容易に想像されよう。水と関連した「飲む」という用語が水と平行してミルクに酒に変わる。如何に乾燥文化を反映したものであるかの端的な一例である。我が国の^{しんしょう}身上つぶしの小原庄助さんには「朝寝」「朝酒」の他に「朝湯」が大好きで、が入ってきており対比すると、アラブの「朝の一飲み」がミルクとなつていし日本文化の「湯好き」の特徴も浮き彫りになっている。

集まりや酒宴が朝の早い時間帯の場合すらある。そうした場合はファジュール（明け方）の礼拝の後と思われる。上の引用文の前段落には「ある招き」と出てくるだけで時の限定がないが、主人公アブー・ザイドの一座の者達への挨拶の中に「今朝も健康であられますよう！ 朝の一飲みもまた気持ちいいものでございましょう！」という語句、およびこの座を辞去する際の「早朝の幸運」の早朝 (ghadaah, maghdaa ないし ghuduww) が日の出と正午との間「午前」を意味していることから分かる。またその集まりの場は、モスクとか図書館とかの公共の場ではなく、おそらく学識もあり、裕福な者の私的なサロンや客間であったろうと思われる。こうした場で話題となる最もポピュ

ラーなもの、それは偉大な人物の伝記であればその逸話であつたり、詩人の詩歌であればその解釈をめぐつての話、もっと寛いた閑談であつた。

その「朝酒」の〈酒〉sharaab 方であるが、これも朝 sabaah の派生形サブーフ sabuuh の方で言い表されることは既に述べた。そして「朝酒」のサブーフ sabuuh に対してガブーク ghabuq なる語が配され「夕酒」としてよく引き合いに出される。酒を飲む行為者「朝酒飲み」のことはスプハー subhaan とこれも独立した語となっている。「朝酒を提供する人、朝酒を勧める人」こちらはサービフ saabih と言っており、いずれも一般人にとっては好ましい人物とは見做されない。「朝酒飲みに取りつかれた者（＝溺れた者）程に嘘つきな（＝信用の置けない）」akdhabu mina l-akhiidhi subhaan との諺がある（May. II 166、Ask. II 172、Zam. I 290）。「朝酒飲み」を強調した言い方があり、これがサバハーン sabahaan であり、「大いなる朝酒飲み、折りあらずすぐに朝酒を飲もうと急ぐ者」だそうである。動詞にも語根動詞サバハ sabaha には自動詞・他動詞ともに用いられ「朝の飲食をする、行う／与える、持て成す」があり、自動詞には「朝の飲食に満足する、満たされる」の意味もある。詩人 Abuu Nuwaas などの「朝寝・朝酒」は好個の詩材となっている。

「朝の挨拶をする、午前中に行う、訪れる、朝の日課をこなす」など午前中に行う行為をタスビーフ tasbiih と言ひ、動詞はサツバハ sabbaha で表される。また「朝食」は一般にはフトゥール fuṭuur の語が知られるが、上のタスビーフ tasbiih とも言ひ、時を明示した食事と言える。「朝食を取る」と言う動詞はタサツバハ taṣabbaha で表され、用例として「朝食に七個のデーツを食べる者」man taṣabbaha bi-sab"i tamaraati "ajwatin との言い回しがある。ムスリムにとって預言者の慣行に倣つての質素さが勧められる。

アスバハ aṣbaha と言う語形は名詞が動詞化される用法である。「朝になる、朝に行く」の意味である。しかし「朝になる、朝に行く」ことから、時を中和化した英語でいう become の意味に汎用される。「彼は医者になった」は aṣbaha ṭabiiban のような〈朝〉とは無関係な用いられ方をする場合もある。命令形を用いた「おお夜よ、朝になれ」aṣbiḥ yaa laylu との表現があり、忌わしい夜などがあつた時に口から出る言い回しとなって「諺言集」に伝わっている（Ask. I 192、May. I 403、Zam. I 200）。

第2-4節 昼の後半 タ・午後 第四分

夕べ、夕方方を指す代表語はマサーウ masaa' である。アラブ世界では、正午以降深夜までの挨拶は「良き夕べを！」マサーウ・ハイル masaa' al-khayr である。もっとフォーマルには「アッラーがあなたに良き夕べを過ごさせますよう！」massaa-ka llaahu bi-l-khayr との挨拶を送る。原文中の massaa は「夕べ（masaa'）を過ごさせる」という masaa' からの派生語で他動詞である。これらの挨拶用語でも分かるように、「夕方」マサーウの語は広い意味では、正午以降深夜までの一日の半分を占める時間帯の代表するものである。それ故「夕方」マサーウというこの用語は一日を二分する概念では正午と夜半とを縦軸に朝夕を分ける「夕」を構成するものであり、日の出と日没とを東西として水平に二分割する概念、昼夜においては昼に当たる。ということはアラブの一日の四分分割時間概念においては、日没から始まって夜半までの第1四分からすると、最後の正午から日没までの、第四分割目「第四分」に相当することになる。

「夕方」マサーウ masaa' は時制の用語においては、「朝」サバーフ sabaah と並んで基礎語彙にな

っている。それ故語根から「夕方」の意味の関与が見られる。ただこちらの「夕方」masaa'の方には原型動詞がないことが奇異に感ずる。それだけではなく、さらに「朝」sabaahには多様な派生語の意味の展開が観られたが、こちらの夕方masaa'の方は随分限定されている。その理由の一端は、これから次節で述べる「夜間」の語彙の豊饒さが多様に展開され、意味層の分化を産み出しているからとも言えよう。夕方masaa'を直義的に動詞化したものが名詞を動詞にする派生形アムサーamsaaであり、「夕方になる、夕べの時間帯に入る」の意味となる。「朝になる」のasbahaは時間が抽象化されて「～になる」となったと同様、このamsaaも夕方の時間帯の意識は中和化されて「～になる」、英語のbecomeの意味と用いられることが多い。但し朝の方が〈若さや勢い〉を表すのに対して、夕の方は〈成熟や老成〉を表す意味合いで用いられる傾向がある。「彼は私の小父になった」amsaa "ammiiの用例のように。「昨日」を意味するアムシamsiはお馴染みの言葉であるから、ご存じの方も多かろう。本来はこのamsaaの直接命令形amsiyであって、三根子目/y/が弱いため、省略されamsiになったものである。朝が〈来たるべきもの〉を指すことは、bukrah（早朝）が「明日」の意味に外延してゆく。この概念は英語のmorrow（朝）がtomorrow（明日）になった背景と類似していよう。一方これとは対照的に、夕方masaa'は〈去ってゆくもの〉を指して、それがアムシamsiを「昨日」との意味に外延させたわけである。「昨日の夕方、昨夜」は、したがって同属語が用いられてマサーウアムシmasaa'amsiと言うことになる。

「昨日」アムシに関しては、本来はマサーウから派生したイムシッyun imsiyyunという純然とした名詞の語形がある。が、イムシッyunでは発音しにくいため、それが平易化されてアムシamsiに変わったとする説もある。

同じ動詞派生形massaaは他動詞になり「夕べ(masaa')を過ごさせる」である。上の引用「アッラーがあなたに良き夕べを過ごさせますよう！」の箇所で言及しておいたが、一般には「夕べの時間帯に行く、夕方に訪問する、夜間の旅に出る、旅を行っている」などの意味を担う。夕方過ごす場所はマムサーmamsaaと呼ばれるが、日常ではサマル（夜の閑談）が行われるテント前や屋上などを指すが、入日、すなわち日没の絶好の場所とか、月見台（新月を観察する絶景の丘、新月台）などにも特化して用いられる。

第2-5節 昼間の細分・時間分割概念

アラブ世界は暑熱乾燥地帯であるので、昼間と夜間の活動は夏に向かうほど後者が盛んとなり、前稿でも観た如く多様な展開を見せ、また「夜」の語彙においても実際五更制、三更制など豊かな文化相を開示してくれている。以下では「昼間」の時間分割概念を見てゆく。「昼」は大まかには既に「朝・午前」、「夕・午後」と上に観てあるが、もう少し細かな「時制」を見ていってみよう。以下大まかに五つに分類して、具体相を分析してゆく。1 日の出の頃、2 午前の頃、3 正午の頃、4 午後の頃、5 日没の頃の順でみてゆこう。

昼間の時間分節について考察する前に、今までの一日の「時制」を踏まえる意味でも、その事例をメッカ巡礼の巡礼月八日から十日までの定められた儀礼行を見て行ってみよう。このメッカ巡礼においても朝、午前、昼、午後、夕、夜などが儀礼の重要な節目となっているからである。巡礼者は巡礼月七日目までにメッカに到着して、八日目にカアバ正殿の周りを七周するタワーフの行と、隣接するサファーとマルワの間を三周半早足で行なうサアイの行を済ます。八日目の夜には東方五



図4-2 太陽の描かれ方



図4-1 毒蛇に噛まれたら

ガレノスの『テリアカの書』 Kitaab al-Diryaaq のアラビア語の訳本の挿絵より

図4-1はテリアカ(解毒剤)の説明図である。アラブにはコブラ類の毒蛇が多い。蛇毒に効くという「大地のテリアカ」と称される薬草木を實際試してみる。農夫と思われる中央の人物が試される。蛇に足を噛ませて、その「大地のテリアカ」の葉を採ってその漿液を解毒にしようとしているところ。両脇の騎乗の人物はそれを見守る医学薬学者。日中であることは、上空の太陽で分かる。

図4-2 天空拡大図 上空には鳴らしき鳥が舞い、天空は青い色で半円が上に広がって行く。左には白雲が小さく配され、太陽は大きく赤い色で、そしてそこから放たれる光線は金色で放射状に描かれる。光線の長いのは熱さの強烈さを強調しているよう。アラブでは光線は太陽の「子ども達」とも、その「矢」とも「槍」とも喩えられている。

kmにある聖域ミナーで野営する。九日目の昼までにさらにその東方15kmにある聖域アラファートに行き午後のウクーフ(立行)に参加せねばならない。九日目の日没と共にアラファートを後にして、ミナーとの中間点の聖域ムズダリファに移動し、そこで野宿する。この間翌日の石投げ行に用いる小石を拾い集めておく。巡礼月十日目はイード・ル・アドゥハー(犠牲祭)として知られる日で、先ず早朝ミナーにあるジャムラ(悪魔が宿る石柱)三基の内、もっともメッカ寄りのアカバのジャムラでラムユ(石投げの行)を終える。午前中までにアドゥハー(犠牲を屠る行)を済ませる。これが完了するとイフラーーム(聖なる状態)から解放される。

2-5-1 日の出の頃

「夜明け」を迎えるにしても、自然現象に鋭い観察眼を持つ砂漠民は「夜明け」の一瞬を見逃さない。驚くべき目であるが、筆者も何回かそれを知ろうとして試みた。そうして分ったことであるが、東の地平線上にずっと横に白い明るさが走る。これが現地のアラブが言う「夜明の一閃」、「狼の尾」なのだ、と合点した。「夜明けの一閃」、闇を切り裂く一瞬である。「夜明けの一閃」のことを現地の人々はファルト(fart)ともハイト(khayt)とも言うが、闇の中に瞬時走るその白い一閃の意味なのである。この一閃が入って初めて闇の中に白さが混じり、それを押し広げてゆくとされる。そしてこのファルト「夜明けの一閃」が走って後が「夜明け」ファジュール(fajr)となるのである(図3参照)。「早朝の礼拝」で用いられるサラート・ファジュール sala al-fajr のあの用語である。従ってこの「夜

明けの一閃」を待って「早朝の礼拝」のアザーンが呼び掛けられることになる。

このファルトに関して、遊牧民の驚嘆すべき眼識を如実に示す二つのことがある。その一つは、このファルト「夜明けの一閃」の走り方である。この語を先程「一閃」と訳したが、我々のイメージでは一直線とか稲光りのような形を連想しよう。だが、我々のイメージとは異なり、ファルトの走り方は、「狼の尾」の形様だそうである。夜の闇を「狼の尾」の形をした白さの一閃「夜明けの一閃」が突ん裂くということである。そしてまた我々の感覚では、稲光のように東から西に天球を突っ走ること、と考え勝ちであるが、これもそうではなく、東の空の低い方に平行に起こることなのである。

そしてその第二は、このファルト「夜明けの一閃」は一度ではなく二度起るとのことである！最初のファルトは、その白さを側面に伸ばすことなく、地平線上に恰かも暗闇に対する障害物のような形で現れるとのことである。このファルトは本当の夜明けとは認められていない。というのはこの「夜明けの一閃」は、すぐに消えてもとの闇に戻ってしまうからである。間もなくであるが第二のファルトが走る。このファルトはすぐに横に広がり、地平線を白く染め、その後次第にその白さを天空に伸ばしてゆくのである。従ってこの第二のファルトが「夜明けの一閃」となってこれ以降をファジュール「夜明け」と称するわけである。

なぜファルト「夜明けの一閃」がこれほどに認識されて、日常化しているかというと、朝及び昼の節目とされるものであるし、それは同時にムスリムの断食の開始時と深く関わっているためである。ファジュール「夜明け」にはもう食事が許容されないからである。食事はサハル（夜明前）までの時間帯までは許容されている（図3参照）。物の本にはムスリムの断食は「日の出から日没まで」と書いてあるが、そうではないことは現地で直ぐにわかることである。第一のファルトの時間帯では「夜明け」ではないために、その時間帯までは瞬時の違いであろうとも、スフル（断食前に取る食事）を食べてもさしつかえないことになる。これを理由に寝過ごした者の中には、未だ本当の夜明けではない、と理屈をこね、夜明けの「白さ」が広がっているのに、スフルを「白々しく」も口にパクつく者もいる。

また「夜明け (fajr) の礼拝」も厳密には、この第二のファルト直後がもっとも正当な時間帯なのである。空気が澄み、眺望のきく砂漠の民においてはこの識別は容易であるが、空気がよどみ高い建物が立並ぶ町では、「夜明け」の識別は難しい。現に預言者の時代から、「夜明けの礼拝」のアザーン（信者への礼拝の呼び掛け）は「夜明前」にしても良い、とされたのは、都市民を配慮してのことであろう。

「夜明け」を表示する代表的語はファジュール (fajr) である（図3参照）。ファジュールの語根は「物を切裂く、裂き広げる」の義であるから、「夜の闇を裂き、昼の白さを広げる」ことがその語義であろう。ファジュールは、闇である黒色に代えて、明かりである白色を拡げるだけではない。ちょうど日没直後のシャファク（夕映え）が赤さを表現するように、太陽がまだ姿を見せない折の空に広がる赤さを言っており、我が国でいえば「アカネ」色と言う事なろう。そうした意味も含んでいるのである。

夜が明けてもまだ出ている星、暁の明星は、金星を主として言うのだが、アラブでは「ファジュールの星」と言われている。この「ファジュールの星」が消えない頃、羊主体のベドウィンは、早くも牧地へと羊を放牧するためにテントを後にしてゆく。「羊を導く星」として砂漠の民はイメージ化している。さらには西に沈みかけてゆくのが黄道12宮のどれか、28宿のうちのどれか、星座中の

どの辺りかで、歳時を計っているのである。

明け方にも様々な言い方がある。前稿で言及したことであるが、闇が払われ明け方の白さを強調する時トゥルワ (tulwah) という語が用いられる。この語は「ある色が辺り一面を覆い尽くす」語源から発しており、しかも「草花の白さ」を意味していることから、白色が早朝の空に広がった様を言い当てたものである。

ブルジャ (buljah) は「物が明別できる明るさ」の謂であり、丁度タソガレ（誰ぞ彼は）を指示するガサク (ghasaq) と時間的にも意味的にも反対になる概念である。アラブの言い回しに、「ドゥルジャにブルジャを継いで夜旅をし、遂に到着した」というのがある。夜旅をする者は、夜の最後の三分の一に達したドゥルジャの頃軽い休息と睡眠をとるのが普通である。また夜旅を急ぐあまり、ドゥルジャの時間帯に休息をとらなかった旅人は、明け方のブルジャの時間帯に一息入れるのが慣例である。またその休息もとらず「夜旅を休息も取らず強行して遂に目的地についた」という無理を強いた、急いだ旅を敢行したことを言ったものである。

辺りが完全に明るくなり、「日の出」が指標になる語、これがブクラ (bukrah) である。ブクラはよく「早朝」の意味合いで用いられるが、時間帯は「夜明け」から「日の出」までを指し、昼の最初の部分とみなされている。なお、このブクラはエジプト方言ではボクラと発言され、英語の morrow と同じく（朝）の義が変じて夜から一日が始まる文化なので、「翌朝」の義が昼中心文化に移行し tomorrow 「翌日」の意味に変じたものと思われる。即ち、口語ボクラは「明日」の意味で一般化しているが、「早朝」→「あした＝朝」→「あした＝明日」の意味変化した。我が国の「朝＝あした」と同じ発想である。また同じ語根から派生したブクール bukuur も同義に用いられる。

このブクラ「早朝」の語義から、これをもとにした派生語は一日の始めに行なうこと、時間的に早いこと、始めてのことを意味しているものが殆どである。動詞 bakara は「早朝に起きる・行なう・（人の所に）出向く・訪ねる」となり、abkara というと「（人を）早朝に使いに出す、～に向かって急いで行く」、ibtakara というと「最初に（人に）話しかける、初物を食べる」の意味である。ビクル biki という「初生児、初物、処女」、バクル bakr という「若いラクダ」等々である。最後者バクル「若ラクダ」は人間の「若者」と同じように理解され、人名にもアブー・バクル（若ラクダの父）だとか、バクル族など部族名にも好まれて使われている。

こうして日の出を迎える。日の出が叙された事例をここでは二つ紹介しておこう。

事例1：品行方正さはグイム（邪悪さ）を伴ったら何の意味もなからう。陽光にガイム（雲）が邪魔したら明らかな日の出とも言えまい。ウッド（親愛の情）がアスフ（邪心）と何時まで同居できると言うのかね。またフル（尊敬の念）がハスフ（軽蔑の念）とどんな状態で和合できると言うのかね。

（Har.4 話 拙訳 I 153 原文38）

「陽光に……日の出とも言えまい」は原語では annaa tushriq shamsun ma'a ghaymin. 直訳は「どうして太陽が雲とともにあったなら日の出の輝きとなろう」。tushriq < ashraqa は「太陽が輝く」、より厳密には「日の出時に太陽が輝く」である。

事例2：二人の間で取り交されていたこのような会話に耳傾けていた私は、二人（がどんな人物か）を個人的に知りたい欲望にかられた。そこで太陽（ズカーウ）の息子（陽射し）が顔を出し、明るさ（デイヤーウ）が大気を覆う頃になって、（二人の方に）出かけてみることにしたのだ。駱駝（リカーブ）が出立してしまう前に、また烏（グラーブ）が目覚めるより早く。そして昨夜（ライリ

一) の声のした方角を辿って歩き、目を凝らして (ジヤリー) 顔という顔を眺め廻したのだ。

(Har. 第4話 拙訳 I 155)

「太陽の息子が顔を出し明るさが……」太陽の息子 *ibn dhukaa'* とは「陽射し」のことを言っており、それが「顔を出し、明るさが大気を覆う頃」と言っている方から、日の出の頃の様子を言っているのに間違いない。ズカーラは「赤く焼けたもの、灼熱のもの」であって、朝・夕の日射しの強くなるときの太陽を意味しており、その赤味がかった「日射し」が「太陽の息子」になる。

日の出はシュルーク *shuruuq* あるいはガゼーラ *ghazaalah* と言う。シェルークは慣じみの語である。「西」*gharb* に対する「東」であるシャルク *sharq*、(西アラブ *maghrib* に対する)「東アラブ」マッシュリク *mashriq* であって「日出ずる所」など、「東」に関与する語でありその同族語なのであるから。また「星辰が出ずる所」でもある。これをマトウラウ (*matla'*) と言って、文字通り (日が、月が、星が) 昇る所なのである。日昇時西に没する星辰、それと対象的で対となる日没時に東に昇る星辰。これらは暦時、天文、占星術では重要な意味を持つ。マトウラウの頃には砂漠の民は「朝食」を終って、放牧に出かけていようし、都市の民はこの頃ようやく起き出すのである。

2-5-2 午前・朝

朝はものみなを明るくする。朝の陽光はものの隅々までも露わにする。夜の闇に隠れていたものをすべて明るみに出してしまふ。アラブの朝の概念の中には、それ故「朝は裏切り者」、「朝ほどに裏切る」という言い回しがある。事例をここで出そう：

彼の裏切りがありてこの方

我が心にありては朝方が

疎ましきものになり果てたり

「朝は裏切り者」との諺の如！

代わりに夜を愛するよう仕向けたり

時間^{とき}の暗黒^{やみ}は夜^まを守護^{もも}るものとも

隠れたき者には隠れ蓑とも

なり得る故に夜を愛したり！

彼の非難中傷は数限りなし

まれに真実の垣間見はあるとせも

(Har.18話 拙訳 II 103-04)

引用文のなかの「朝は裏切り者 (*al-sabaahu yulfaa namuuman*)」とは、その原義は「朝は裏切り者と見出される」で、他の諺は「朝程に裏切りの (*anammu mina s-sabaah*)」である。この後者の諺の代表例として「朝」とともに「ガラス」だとされる。ガラスは中身が直接見えてしまう。隠しておこうとするものや内密が保てない。それ故秘密が保てないガラスは「裏切り」を働くことになる。一方「朝」は、夜の闇がすべてを包んで秘密を隠すのに対して、その陽光の下、すべてを白日の下に晒してしまうことから、「秘密の漏えい者」、「裏切り」の代名詞になっている。

「早朝」を表示する語には、ガダー (*ghadaah*) がある (ガドゥワ *ghadwah* とも言う)。このガダーは狭義にはブクラと同じく「夜明けから日の出までの朝」である。しかし広義にはこの語の対となるイシャーウ (早晩) にも広い時間的スパンがあったように、この語にも「陽が高く上る」まで

の広い時間帯が許容されている。そして「もっとも快適な時」という概念でもある。ガダー（早朝）とイシャーウ（早晚）とを「若者」と喩える次のような事例がある：

と、その時である、一人の老人が進み出た、寄る年波で背中が曲がり、そのサガーマの木を夜昼（の連続＝歳月）が白く飾っていた。参集していたもの全員が老人の登場を歓喜で迎え、出向いては老人と挨拶を交わしていた。（Har. 30 話拙訳 II 364）

「夜昼」の原語 *fatayaan* とは *fataa*（若者）の双数形で「二人の若者」の意味である。一日を擬人化すると「白さ」が残る「夜の若者」（＝若い時期）は宵（*'ishaa'*）であり、「昼の若者」は早朝（*ghadaah*）である。さらに意味は拡大して「夜昼」と一般化した。文中「サガーマの木 *thaghaamah*」とは、頂に白い花を咲かせ、実も白く実る樹木。半島内、ネジュドやティハーマの岩場や山地に生育する。本文もその一例であるが、老人の白髪の例えとして繁用される。

アラブは伝統的には朝夕の二食であり、その表現も上の対概念そのままである。即ちガダーの時間帯に食べることをガターウ（*ghadaa'*）とし、イシャーウの時間帯に食べることをアシャーウ（*'ashaa'*）とし、「朝食」、「夕食」の概念を形造っていたわけである。時の語が生活に反映されていることが分ろう。しかし現今の三食になってからは、時間の語義とは関係なくなり「朝食」はファトゥール *fatuur* となり、ガダーウの方は「昼食」の意味になってしまった。

ガダーより時間が進み日昇が高くなるとザワール *zawaal*（日高く昇る頃）との時間に関する用語が適用される。朝が昼に近づく頃、陽が高く昇り、西に伸びて長かった日影が短くなり暑熱が増して来る頃、その時間帯のことをザワール *zawaal* といっている。この「陽高く昇る時間帯」を表す用語ザワール *zawaal* は語根義「去る、消滅する」から由来する。陽が射すと、その陽光に当たる物体は後ろの大地に黒い影（*zill*）を落とす。朝方長かった日影も、太陽が高度を上げて行くに従って、その長さが短くなる。そして正午に至って、日影が全く無くなる。このザワール *zawaal* とは語根 *Z/W/L* が反映して、「日影が去る、消滅する」ことから、その時間帯を指す用語となった。「陽高く昇る頃」ザワールから動詞も派生しており *zaala* < *zawala* 「陽が高く昇り、一日（＝昼）が進む」、「陽が高く昇り、昼近くには（影が）縮んで無くなる」の意味となる。イルタファア *irtafa'a* と同義を実現している。また能動分詞形 *zaa'il* 「去りゆくもの、移行するもの＝太陽」もある。「影の去りゆくもの（太陽）、その影を無くした（陽を高く上げた）」*zaala zaa'ilu z-zill* のような同韻の響き良い言い回しがある。このザワールの語から「日時計」*mizwalah* も派生していることは頷かれよう。陽の出ている間は、その影が投影する傾き、長さが文字盤に映し出されて尺度のなるわけであるから。

但しザワール *zawaal* には両義的面があり、「陽が傾く夕方」とする説もあることを付言しておこう。

次にドウハー *duhaa*（昼前）について述べておこう。ここで触れるドウハー *duhaa* は、我々の知る犠牲祭イード・ル・アドゥハー *"iid al-adhaa* と大いに関わる語である。前節2-5の冒頭で述べたように、犠牲祭は巡礼月十日のイフラーム（巡礼としての禁忌期間）の最後の行事である。そしてその犠牲アドハー（*adhaa*）は十日の当日であれば、何時でも良いというわけではない。犠牲を捧げる刻限は、午前中に済ませねばならないことになっている。その刻限がドウハー *duhaa*（昼前）なのであり、その刻限に「犠牲を捧げる」ことが派生形のタドヒヤ *tadhiyah* で、その動詞はダッハー *dahhaa* とされる。従って「犠牲」と「昼前」の両者は語根を同じくし、したがって意味的にも繋がっている。犠牲アドハー *adhaa* は物質名詞となり、しかも複数である。単数はアドハー

adhaah、個化表示される語尾 -ah が付される。こうした具象化された「犠牲」の前の段階がタドゥヒヤ tadhiyah であり、「ドゥハー duhaa の時間帯になされること、なさねばならないこと」であった。動詞はダッハー dahhaa と言う。こうした犠牲祭イード・ル・アドゥハー "iid al-adhaa、および犠牲アドハー adhaa の内容からも類推できる如く、犠牲は遅くとも昼前に済ませておく。それを過ぎての犠牲は単なる屠殺に過ぎなくなることを「時」として明示しているのである。第3-1節 事例2は法問答として犠牲祭の犠牲を屠る時が何時かを問うている好例である。時間帯ドゥハー duhaa とは「午前の遅い時間帯」、真昼には至らないが「昼前」に相当する用語なのである。ドゥハー duhaa は時間帯として「昼前」を指す。そして一般には「私は昼前に彼に会った」laqittu-hu duhaa の如く用いる。

以上述べた如く語根√D/H/Y または√D/H/W は〈犠牲〉に関わるのではなく、時の表示〈昼前〉に関わっていることになる。語根動詞 dahaa (< dahaya または dahawa) は「(昼近くになって光線が)より明瞭に顕われる、より強烈になる」である。興味深いことに、人の場合影=生命と喩えられる。そうした言い回しに「彼の影が光線として明らかになった」dahaa zillu-hu がある。「(白日の下)彼は自分の影を無くした」=「彼は陽に晒され果てた=死んだ」、同じく「おおアッラー、あなたの影を我らより無くならせませんように(=助けたまえ)！」laa adhaa llaahu la-naa zilla-ka の嘆願とか、「ヤツの影を奪いたまえ！」adhi llaahu zilla-hu の呪いなどの言い回しがある。さらに「かげ」は影と陰があり、それらのことは後述第3章2節の日射しの「かげ」項で述べよう。

派生の他動詞 dahhaa は「ドゥハーの時間帯に食物を与える」ことから朝遅い時間帯なので「朝食と昼食とを兼ねたランチを取らせる」の意味となる。この再帰形が tadahhaa で「ドゥハー duhaa の時間帯に食事を取らせられる=食事を取る」である。そして「この時間帯に食事を取る人」はダフヤーン dahyaan とかダフワーン dahwaan と、その行為者、動作主を表す。名詞から派生する動詞型アドハー adhaa は「ドゥハーの時間帯に入る、行動する、営為を行う、犠牲を捧げる」となる。

ドゥハー duhaa を異化したダハーウ dahaa' は更に「正午に近い昼前」「真昼に正に入らんとする時刻」という意味の拡大を見せている。ダハーウの刻限から、一日を四分割する午後に入り、最後の「第四分」目が始まるとも説かれる。

2-5-3 昼・正午頃

昼は太陽が空の真上に昇った頃、正午・真昼となるが、よく知られた用語ズフル zuhr がそれを表す。「真昼・正午」の代表語ズフル zuhr はムスリムならば誰も知っていよう。日に五回の礼拝のなかの、「正午の礼拝」の名称、サラート・ズフル salaah al-zuhr として周知されているからである。「正午の礼拝を行う」sallaa al-zuhr のように、馴染みであるためにズフルだけで、「正午の礼拝」を意味させることも多いほどである。ズフル zuhr とは太陽が真上、中天に南中に達した時間帯を言う。わが国が正午、すなわち午(うま)の刻を真昼として、その前を午前、後を午後と言っているように、アラブ世界でもズフル zuhr (正午)を真昼として、午前をカブラズフル qabla z-zuhr (真昼の前)、午後をバアダズフル ba'ada z-zuhr (真昼の後)と言っているように「昼」の語義を担う中心となる用語となっている。ズフルと言う用語は派生語であって、より語根の基本的意味を実現している zahr ザフル(背、背中)に由来する。ズフル zuhr (正午)の概念をザフル「動物の背中」として東アジアでは四つ足動物として「馬」で表わしているが、アラブではラクダがその典型であ

り、そうした四つ足動物の「背中」と関係している点、面白い。すなわち動物の体の中で最も高く頂点として目立つもの。それがズフル「背・背中」であり、それからさらに天空にもっていった派生語がズフルであることを示している。ズフル *zuhr* には他の派生形ザヒーラ *zahirah* があり、同じく「正午・真昼」の意味で用いられる。ズフルを動詞化した *azhara* は「正午・真昼の時間帯に入る、正午・真昼に事を行う、正午・真昼に旅立つ」などのその時間帯の人間の営為を表す。

ズフルは本来ならばこの「正午・真昼」が正しい。しかし辞書類には「太陽が南中した少しあと」とある。それは「正午の礼拝」と関係しており、「正午」を見定めるために、今か今かと太陽を見上げる、仰ぎ見ることになる。そして太陽が物の影を無くす正に南中した時に礼拝行為に入った場合、その行為自体が太陽を崇めることに通じ、偶像礼拝と結びつくことになる。そのためイスラムではこの太陽崇拝との紛らわしさを避けるためにも、正午から少し間を置いた時間で「正午の礼拝」を行うことになっている。そのため、正午とせずに、「太陽が南中した少しあと」というような記述がまかり通ることとなる。

もう一つ「昼」と係る語ハージラ *haajirah* がある。「昼下がり」とでも訳せようか。ここで「昼下がり」が「白日の猛暑」の事例を述べておこう。事例：

我々がキャンプを張っていたのは、(メッカ近郊ミナーの) ハイフの地であったが、折しも夏の暑い盛りであった。この白昼 (Zahiiir) の猛暑を避けるべく、致し方なく日陰に難を逃れたのであった。我々はあるティラーフ (=なめし皮製テント) の中にいたのだが、そこに集まっていた仲間はみな真摯な人達であった。石砂利でできているこの大かまど (とも称すべき大地) はいやが上にも暑さを増し、白日 (hajiir) の猛暑は (太陽光線がどれ程熱からうがそれをものとししないと云われる) カメレオンの目をも眩ませる程であった。

(Har. 14話 拙訳 I 407 原文119)

引用文のなか、「夏の暑い盛り」の原文はマアマアーナ・ツサイフ *ma"ma"aana s-sayf*。マアマアーナ *ma"ma"aanah* は「最高点・クライマックス」を意味しており、暑熱に関しては「猛暑、酷暑」となる。これを動詞化したマアマア *ma"ma"a* は「酷暑の中を行動する、歩く」の意味になる。「白昼の猛暑」の原文は *harra al-zahiiirah* で直訳は「正午の暑さ」である。正午のザヒーラは一般語ズフル *zuhr* と同義語である。もう一つは「白日の猛暑」の原語は *al-hajiir* であり、本稿の「正午・真昼」で抜かう *haajirah* と異派生語であり、ズフルより少し遅く、白熱の度合いが最高に増す頃のこと。「カメレオンの目」と出て来る。カズウィーニー (1283没) 著の『創造物の驚異』によれば、「カメレオンは動作の鈍い生き物として作られたが、食べ物を獲るのにも鈍かったために、神はその目をあらゆる方向に回し得るよう便宜を計られた。足を動かす必要がないよう、また体を近づけたりする必要なしに、獲物 (多くは蠅) を狙い、捕えることができるようにとの配慮からであった。しかし今度はカメレオンは、動物ではないかのように、石であるかのように、動かなくなってしまった。そこで神はこの創造物に体の色と舌の長さを変える能力を賦与された。木の上にいる場合には、その木と同じ色に見せ、餌となる蠅やその他の小動物が近づけば電光の如き素早さの、長い舌でそれを捕えるのである……」。カメレオンは、常に太陽と向かい合い、その熱射に耐えているところから、冷質な身体を温めていると考えられ、何よりも「暑さに強いもの」と信じられている。そして、カメレオンの目は太陽の熱射に温められて通常の状態になるとも信じられ、涼しさの喩えとして、「カメレオンの日程に涼しい」という言い回しがある。

正午、ないし正午からアスル（午後の中間）の時間帯、これをハージラ haajirah と言い、ハジール hajiirah とも言う。「一日の中でもっとも温度が熱くなる時間帯」であるから、ズフルより後の時間帯を表し、したがって午後一時頃が指標となろうか。また特化して「夏の昼頃」として猛暑が指標ともされている。ハージラ haajirah にしてもハジール hajiirah にしても、いずれも馴染みの用語ヒジュラ hijrah（逃げ移る、避難する→「聖遷」）と同根語である。すなわち昼のこの酷暑の刻限には、その熱暑を避けるべく、日陰のある場所、木陰や岩陰、砂丘の陰、テントや建物の中に「逃げ移る」こと、避難をせざるを得ない、こんな背景を持った用語である。こんな酷暑の中、活動する、せねばならない人もいる。ハージラから派生した動詞 ahjara および hajjara は「ハージラの時間帯に活動する、旅をする」を言い表す。そしてその行為者・動作主はそれぞれムフジル muhjir、ムハッジル muhajjir である。前者の例、「我々はハージラの時間帯に家族の許に着いた」 ataynaa ahula-naa muhjiriina のような用い方をする。如何にも暑い中を汗をかき、喘ぎながら漸く辿り着いた、という意味合いが見て取れよう。後者の例、「人がハージラと言うような時刻に旅する者などいようか？」 hal muhajjirun ka-man qaala haajirah. これはハディースからの引用であるが、酷暑の中で旅を続けることの驚異と疑いの表出を読み取れよう。

なおこの頃の日射、熱射に関しては次節陽射し 3-1 で言及する。

2-5-4 午後・夕の頃

午後とはシアスタ文化圏でもあるアラブ世界は、一番熱い時間帯は「昼寝」の時間帯でもある。昼寝・うたた寝、昼間の軽い眠りのことをタグウィールと言っており、これに対するものがタフウィーム tahwiim と言って、夜間に軽い眠りをとることを意味する。睡眠 (nawm) が一日二回存在する世界では、必ずしも夜間だけではなく「夜のうたた寝」もあるわけで、具体的には横たわって本格的に眠るのではなく坐って居眠りし、こっくりしている様を言う。

「いやいや、陽のある間はどうぞわしの所に留まって下され！ そなたたちの冷やかしに会って、わしの悲しみも随分と癒されたからの。まことそなたたちとの会話は我が魂の糧となり、他人との吸引力となるもののじゃ」と。そこで我々も彼の意に沿うよう心掛け、逆らうことの無いよう注意しながら応じた。話は弾んだ。そのバターの精錬されたものを抽出し、その滓を除くよう配慮しながら。そして遂に昼寝時となって、どの舌も話すのが億劫となった。折りしもその日は暑い日であった、果実を熟れさせるには都合が良いのだが。こうした頃合いを見計らい、老人は「すでに眠気はそなたたちの首の所まで達しており、^{まなこ}眼球の当りを探しておる。まこと厄介な対抗者であって、追い返すことのできない求婚者といったところじゃ。さ一、だから彼と妥協して昼寝をとろうではないか。伝えられている預言者の範例に従うこととしよう。」と言った。語り手アル・ハーリスは話を続けた：我々はアブー・ザイド殿の言うことに従うことにした。我々は昼寝をとり、老人も昼寝をとった。アッラーが我々の耳を打ち、まどろみが我々の目蓋を満たした。こうして我々は正気の領域から抜け出て行った。

（どのくらい経ったろうか）突如として安眠が礼拝（の呼びかけ）によって妨げられた。目醒めた時には、既に暑さは遠のき、陽射しもまた老いていた。そこで我々は、早速日中の二つの沈黙の礼拝をするため沐浴を行い、その後（宗教が課している）責めを緩めるため（の

礼拝を) 遂行した。それが終わると、…」 (Har. 拙訳Ⅱ 124-25)

引用文のうち「預言者の範例」 al-aathaar al-manquulah とは「昼寝をとりなさい」との預言者ムハンマドの教え。暑く乾燥したアラブ世界であり、七世紀の預言者の時代だとしておなじこと。暑熱の真昼時を避けて、冷涼な夜間に活動を行う習慣があり、暑熱の時間帯は「寝て過ごし」、その分、活動のしやすい夜間で補った。夜旅の慣行や夜間放牧、夜の勤行など、さまざまな「夜の」活動が存在した。アナス・イブン・アーリクの伝える伝承には「夜の勤行に励め。(寝足りない分は) 昼寝で補いなさい」というのがあるし、「昼寝をとりなさい。サタンの悪が及ばないから」との言い回しは、「サタンの厄災は夜間に集中しており、昼間はその害悪に影響されることはない」という俗信からきており、これらのことから昼寝が推奨されている。また「アッラーが我々の耳を打つ」 *ḍaraba llaahu "alaa l-aadhaani* とは「アッラーが我々を眠らせる→我々は眠りに落ちる」の換言法。『コーラン』18章10節にある語句からの引用である。例の「エフェソスの七睡眠」・「洞窟の人々」が眠りに落ちた時の表現。他にこの引用部分、アラブの特徴的表現があり、上の訳書の脚注をも参照されたい。また引用文の最後のところ、「二つの沈黙の礼拝」とは原語で「ajmaawaani」と言い、単数は 'ajmaa' であり、「沈黙して行うもの」がその義。金曜を除く平日の正午と午後の礼拝は、礼拝前のキラア（コーランの朗誦）もフトバ（説教）も聞かれずに行われることから「沈黙の礼拝」の別称を持つ。本来ならば正午の方の礼拝を言うのであるが、ここでは午後の礼拝のことも指している。「沐浴を行い」は原語 *takarra'a* である。ここでは「沐浴」を意味するウドゥーウ (*wuḍuu'*) の動詞タワッダア (*tawadda'a*) を用いずに、クラーウ (*kurau* 𦙄) から派生したタカッラア (*takarra'a* 𦙄を傷つける]) が使われている。沐浴の中でも、足のクラーウ (𦙄) を中心に洗うところから「沐浴」の共示義を得た。また「宗教が課している責めを緩める」とは原語で *halla mina d-dayn* とある。日に五回の礼拝はラクア（礼拝所作）が定まっている。「早朝」二回、「正午」四回、「午後」四回、「日没」三回、「夜」四回である。どれかの礼拝を欠いた場合、それはダイン（責め）となる。ここでは正午の礼拝を欠いて午後の礼拝に入ったので、まず午後四度の礼拝のラクアを済ませたのち、各自、己の責めを解く正午四度の礼拝のラクアを行い、解放されることになる。このように日に五度の礼拝と言っても、状況に応じて欠いてもよく、その場合はその後の礼拝で補えば許される。

午後には午睡の習慣があった。上に注したように、既に預言者の言行録に存在している。午睡の習慣が引用のように作品の中に出てくるのは珍しいことである。実生活ではごく当たり前の習慣であって、「昼寝をとった」で片付けてしまうのが普通であるから。

現代のアラブ社会では、午後二時から三時頃まで働き、その後帰宅して昼食を食べ、その後午睡に入る。そして、夕方になると一日の第二ラウンドが始まり、働く人は出勤し、そうでない人は寛ぎの時を送る。早目に午睡をとった後で昼食に入る場合もある。そうした場合予定していたものではなく、不意の来客であったため、本格的調理その他に手間取ることになり、設定としてその順にした場合もあるわけである。しかし、空腹を抱えて昼寝をとることは例外と考えた方がよい。むしろそれよりは、昼食をとって、満腹になってから昼寝に入ったほうがより合理的であるし、現代のアラブ社会もそのようになっている。または、社会全体が余裕を持ち、時間に捕われない、ゆったりとした時代であったので、午睡といっても時間幅があり、「午睡後に昼食」が常態であったということも考えられる。いずれにしてもシエスタ文化圏の一つの特徴の指摘と言えるものであろう。

「午後」の用語に関してはアスル *"asr* の語が良く知られている。アスル *"asr* とは「陽影が等倍の

長さになる」意味合いがある。このアスルは時の用語としてはムスリムでは知らない人はいない。と言うのもいわゆる一日五回の義務の礼拝のうち、「午後の礼拝」の用語に採られているからである。サラート・アスル *ṣalaatu al-"aṣr* が「午後の礼拝」の名称である。では午後の何時ごろか、何が尺度になるのかと言うと、太陽が地面に移す影で判断される。東の地面に映る人や物の黒い影が、実像と等倍になった頃が目安とされる。その等倍になった頃から二倍になったころまでがサラート・アスルの礼拝すべき時間帯とされる。「午後の礼拝」であるサラート・アスルは別名「真ん中の礼拝」サラート・ウスター *al-ṣalaatu al-wuṣṭaa* とも言われる。日に五回の礼拝のうち、二度の「昼」の礼拝（早朝、正午過ぎ）と「夜」の二度の礼拝（日没と夜）との間に挟まれた中間の礼拝に当たるためである。また「二つのアスルの礼拝」の意味で、アスラーニ *al-"aṣraani* の一つと言われることがあるが、もう一つのアスルとは早朝のファジュルの礼拝のことである。いずれも昼夜の端＝終わりに行われる礼拝であるからである、ファジュルの礼拝は夜間の端の、アスルの礼拝は昼間の端の。マグリブ（日没）の礼拝は陰暦であるため、夜の部に位置づけられる。転じてアスラーニは「朝夕」の意味としても拡大している。

アスル *"aṣr* は従って「午後の真ん中過ぎ辺り・午後を中心」、我が国の「^{やつ}お八時」と判断しても良いであろう。シアスタ（昼寝）文化圏のムスリム世界にはこの「午後の礼拝」が一つの日常生活の目安になる。このサラート・アスルを済ませてカーイル (*qaa'il* 昼寝) に入る習慣を持つ人もいれば、その前にカーイルを行いサラート・アスルのアザーンを目覚まし代わりに起き出して、礼拝後夕刻から夜の出勤に出かける人もいる。アスルの時間帯の睡眠＝昼寝であるからこんなことも起こり得る：「彼は眠ったんだが、アスルには（であるだけに）眠れなかった」*naama wa-maa naama "aṣran* (*bi-"aṣrin, li-"aṣrin*)。夜間の眠りは取れたが昼寝はできなかったと。

アスル（午後）に基づいた派生形がある。名詞を動詞化する、アアサラ *a"ṣara* といって、「アスルの時間帯に行動を起こす、行動している」との意味を実現している。

さてアスルは簡単には「午後」と訳されるが、上で述べた通り「陽影の等倍の長さになる午後」である。この時を表す用語アスル *"aṣr* はしかしながら、もっと一般的には、はるかに〈長く広い時〉が中心概念にある。第一節の「時」の長いスパンを表示する語の一つで、用語ダフル *dahr* の箇所で言及しておいたが、それと同じく時間を表す抽象的な「時」、「時代、年代、時期、世紀」などがもう一つの意味の中心である。例えば語用として「アッバース朝時代」を *"aṣr al-"Abbaasiyy* と、「かれは同時代の傑出した人士だ」*huwa fariidu l-"aṣri* などと用いるし、「同時代の、同時代人」*"aṣriyy, mu"aaṣir* など汎用されている。従って、アスル *"aṣr* であっても、ここで述べた「午後」の意味では最も短い「時」の一部を切り取って有意としたものと言える。

次に午後の遅い時間帯、これをラワーフ *rawaah* と言っている。ここでラワーフの一事例を引用しておこう。事例：

と。そこでこの若者の後を付けて行くことにした、あの会話の意味を是非とも知りたい一心から。若者の足取りは軽快であって、イフリート（サタンの別語、またはその一種で、悪霊の中でも高位にあって、ずる賢く大胆な振る舞いで知られる。ここでは変幻自在さ、動きの活発さで例えとされた）のそれを思わせた。若者は商店街の小路を探し回って、ようやく午後 (*rawaah*) にさしかかったとき、火打石のある店を探し当てた。彼はその売り手にパンを手渡すと、代わりに出来の良い火打石を受け取った。(Har. 29話 拙訳Ⅱ 335 原文243)

「午後にさしかかった」の原文は *intahaa "inda r-rawaahi* である。ラワーフが「午後遅く」と厳密に採るならば、原文訳は「午後遅くにおいてそれが終わろうとしている」となり、夕刻近くということになる。

陽が西に傾きかけた頃から日没に至る長い時間帯、これをラワーフ *rawaah* と言っている。わが国ではこの辺りの時間帯の言い方がないので「午後」とか「夕方」とか訳されるが、両方を含む広い時間帯を指す。語根動詞は *raaha* < *rawaha* であり、「去る、行く、消える」の意味となる。時であれば東から昇った太陽が南中した後、西への沈んでゆく時期、明らかに西へ傾きかけた午後の〈後半〉を指していよう。ラワーフ *rawaah* とはしたがって幅はあるが太陽が沈み行く「午後の遅い時間帯」と理解しておいてよいだろう。一つの指標として「昼寝後」も参考となろう。この「ラワーフの時間帯に行動を起こす、旅行に出る」ことは、動詞形 *raaha* で表される。「ラクダたちはラワーフの行動を起こした」*raahati l-ibilu* とは、放牧の日常を反映した表現であり、「ラクダ飼いたちに促されてラワーフ（夕方）に水場へ、設営地への帰途に就いた」の意味となる。

事例：食物というものは一口入れるものすら見出せなかったのだ。町の道という道を、まるでものに憑かれたかのようにほっつき歩いた。渴れた小鳥がそうするように、町の繁華街のあらゆる所を足速に歩き廻った。(時刻が) 朝であろうが、夕方であろうが、そんなことにお構いなく、目の届く所はどこでも、足の踏み入れる所はどこであれ、足を運んだのだ。

(Har.1 話 拙訳 I 83)

ラワーフ *rawaah* と対になるのは2-5-2で述したガダー *ghadaah* であって、既に述べたようにガダーが「早朝から陽が高くなるまでの時間帯」であるから相対化するとラワーフは昼寝後、または酷暑後が意識された「午後陽が傾く頃から日没に至る時間帯」と言うことになる。動詞派生形ラーハー *raahaa* とは「夕方お互いに行き来する、交互に行なう」であり、ガダー *ghadaah* の動詞派生形ガーダー *ghadaa* はこれと対になり「朝方お互いに行き来する、交互に行なう」となる。「私は彼と朝に行き来し、夕べに行き来した」*anna udgaadii-hi wa-uraawihu-hu* とは、行為者は私だけではなく彼の方も同様にしたことをも表している。即ち私も彼も「朝に夕に行き来した、時を置かず行き来した、頻繁に交流を持った」の意味となる。ラワーフすなわち午後の遅い時間帯に「旅すること、旅に出ること」は派生名詞ラウハ *rawha* で表される。一日の猛暑及び昼寝が終わったところの旅で、急ぎの旅、長旅の出発はこの頃に挙行される。能動分詞形ラーイフ *raa'ih* は更に特化して放牧家畜が対象で「ラワーフの時間帯に放牧地から水場や野営地に戻る放牧家畜」の意味であり、*ibilun raa'ihatun* 「夕方放牧地から戻ってゆくラクダたち」のように用いられる。

また「午後遅く」を表示するアスィール *asiil* との用語もある。「斜陽・日没前」と言えようか。矢張り午後でも遅い時間、限度を日没に置き、それまでの午後、夕方を指す用語、これがアスィール *asiil* がある。アスィール *asiil* はほぼ目安が決まっているから、あまり時間帯の揺るぎはない。即ち「アスル」のあと「日没前」の時間帯であることははっきりしている。アスィール *asiil* は「アスルから日没までの時間帯」である。このアスィール *asiil* には指小辞があり、その時間帯の「小一時」を表すのであるが、表示形も幾つかあるので、余程この夕暮れ近くには、こまごまとした日常的な用事や処理事が多かったことであろうことを推測させる。「アスィールの小一時」の語は四種あり、① *uṣayl*、② *uṣaylaal*、③ *uṣaylaan*、④ *uṣayyaal* である。

事例 「そうこうしている中に、日射しは傾き、昼間の残余は（ちょうど洪水に襲われた涸

川の土手のように) いくばくもなく消え去ろうとする時を迎えてしまった。待っている時間があまりに長くなって、太陽もその日射しを淡い光の衣に包み変えてしまった。」

(Har. 第4話 拙訳 I 157 原文41)

引用文中「日射しは傾き」の原文は *harima n-nahaaru*。直訳は「昼が老いる」であり、*nahaar* は「昼」の代表語、*harima* は「弱る、細る、年取る」である。そしてこの派生語が良く知られるハラム *haram* であり、「年寄り、老人」を意味する。ピラミッドもまたこのハラムの語が流用されている。「昼間の残余」の原語 *jurufa l-yawmi*、直訳は「その日の残り跡」であり、ここでは「一日」を意味する *yawm* が「昼」*nahaar* と解されている。最後の行「太陽も……変えてしまった」の原文は *laahat sh-shamsu fi l-atmaar* であり、直義は「太陽はボロボロになり果てた、太陽はボロ着に身をまとった」である。夕刻時の日没表現のひとつの言い回しである。

2-5-5 日没・日暮れの頃

アラブ・イスラム世界では日没・マグリブ (*maghrib*) は陰暦であるため、昼ではなく夜の部に位置づけられる。即ち「夜の初め」である。前稿、第3章「夜」の時間分割概念、第2節「夜」の概念、第3節「日暮れ」の頃概念等を参照されたい。ここでは前項では触れてはいない、夕刻近い時間帯を表す用語を、いくつか言及して補足しておきたい。

午後の遅い時間帯、太陽の光度が白色から黄色や赤色になって夕方が間近となる時間帯、これをカスル *qasr* とする用語で言い表す。日没近くの言い方、カスル *qasr* である。「夕べ間近」と訳しておこう。「私はカスルの時に、彼のところへやって来た」*ataitu-hu qasran* などと言いまわすが、カスル *qasr* とは午後遅い時間帯、ほとんど夕方になる時間帯を指している。*qasr* の語根からしてあきらかに〈短さ〉＝〈近さ〉が意識されており、陽射し西に傾き昼が終わろうとする、「昼の残部の短さ」を言ったもので、したがって「昼の短かさ、夕べ間近」の意味となる。夕方を意味するマサーウ *masaa'*、またはイシャーウ *"ishaa'* と同義とする説がある反面、昼でもアスル *"asr* より少し前の時間帯だとする説もある。カスル *qasr* を動詞に派生させた語に、*qasara* および *aqasara* がある。語根義がより生きており〈昼を短く、短縮させて〉「夕方の時間帯に入る、夕方の時間帯におこなう」である。

陽射し傾き日暮れとなる。「午後が終わり、日没時の頃」、この頃をタハル *tafal*、(またはトゥフル *tufuul*) ということがある。「日没頃」と捉えられている。しかし広く「午後の後半アスルの時以降日没前」としても用いられる。広義の意味ではアスィールと同じであるが、〈日没〉との関連で把握されているので、午後の最も遅い時間帯とされている。太陽の色が黄色や赤色に変わって、西に没する、そんな頃を言っている。タハル *tafal* には他にも「闇を伴って夜がくること」、さらには「闇、暗さ」そのものの意味も持ち合わせている。タハル *tafal* の派生動詞 *tafala* は「太陽が没する、没しようとする」から意味が明確化しよう。「タハルの時間帯に行動する」ことは *taffala* と言う動詞で表される、「夕べの訪れ、夕方の来訪を行う」の意味で特化している。なおタハル、トゥフルに関しては、語根義がティフル (*tiḥ* 幼児、子供) であるように、段階的には「日の出時」の方であるとして、昼の両端を指示して両義的解釈もあることを付言しておこう。

「入り日」のことはジャウナ *jawnah* と言っている。元来は色彩語であり「赤黒色」を指す。太陽の色が白から西に沈む時期、色を失ったり大気に影響され、赤黒くなる。そのことから「赤黒い太

陽」、「入り日」の意味となった。「昇る日」である ghazaalah とは対象的でもあり、対となって用いられる。

日没以降は夜に入り、その第一更になる。前稿の図Ⅲを参照しながら、第3章「夜の時間分割概念」に続けて入ることになる。

第3章 陽光、陽射し、陽向、陽かげ、陽炎^{かげろう}、蜃気楼

太陽が占める昼は、主舞台である明るさ・熱さと〈陽〉の部分で陽光、陽射し、日向、陽炎^{かげろう}が担う。裏舞台である暗さ・涼しさの〈陰〉の部分は陽かげが担う。昼に関連してこの陽射しの陰陽両者についてのアラブの特徴を述べてみる。そして陽射しの産物である「蜃気楼」についても論及する。

第3-1節 陽光 日射し

3-1-1 陽光、陽射しについて

既にお気づきのことと思うが、一日を昼と夜とに二分した場合、夜は月星の関与が大きいのに対して、昼は太陽の関与が圧倒的である。改めてこれは指摘しておきたい。昼間の指標はさまざまな次元において、やはり太陽の位置、太陽の色、陽射しの強さ、陽射しの影などがその時制の指標となっている。

まず陽射し、陽光のことを述べておこう。アラブ地域は暑熱乾燥した世界である。しかも太陽も乾燥暑熱している。すなわち乾湿寒暑の四性質のうち暑にして乾、「火」の性質を帯びる。それ故「火」の性質が倍加されていることになる。アラブ世界では陽射しは冬でも、わが国の真夏並みの強さ、熱さである。それ故陽射しは「太陽の息子」と見なされたし、「炎の角」とも「矢」ともなり、さらに「槍」ともなって日向^{なた}のものを突き刺す。最も直射を浴びるところは焦げるほどに黒くなる。しかしいくら暑くても、「熱」にやられても、逆に「乾」の世界でもある。一旦日陰に入れば、涼しく凌げることになる。日向が嫌われ、日陰は相対的に好まれるのは推察がつこう。それは語彙の多さや多様な相においても観察できる。これから述べる「陽射し」に関してはその語彙数が多いには多いが、「日陰」はさらに結構あり、アラブ世界の特徴である、「夜の文化」と同時に「昼間の〈陰〉の文化」を活気づけている結果となる。

事例1：

騎乗にて当て所無く彷徨^どう 熱き砂礫^{さまよ}蹴り上げながら
天空の太陽また行きつ戻りつ 猛暑^{こいし}に道踏み迷うたか

(Hama. 第28話 拙訳 (2) p.381)

ウマイヤ朝砂漠派詩人ズー・ルンマの砂礫砂漠を昼日中の猛暑の中、旅を敢行するシーンが叙される。騎乗するはとても馬では耐えられない、乗用ラクダである。しかも単なる砂砂漠ではない。熱い砂礫に足を取られて、蹴り上げたり滑ったり、躊^{よろ}めいたり、歩き辛いことこの上ない。いよいよ熱中症の症状が現れる。真上の太陽は行きつ戻りつしている錯覚に襲われたのだ。太陽すらも「猛暑に道踏み迷うたか」と。視覚も脳裏もゆらゆらと揺らめく。

事例2：こうして我々は旅を共にしたのであった。行進はハージラ（日中の最も暑い時間帯）まで



図5 アストラベを太陽に撃つ ハリーリー作『マカーマー』第39話のさし絵より

領主の婦人が臨月を迎えたのに、なかなか出産しない。領主やその部下、使用人たちが悲しみに沈んでいる。難破してこの島に上陸し、その先で領主の邸で難産対処法に立ち向かうことになった主人公。難産は赤子の方だと観た。そこで生まれるのを恐れている胎児に対して、主人公が呪文やこのようなアストラベで占星術を用いて刻限を読み取り、見事出産を成功に導く。四角い枠に囲われ、上二辺には赤いスパンドレル（隅飾り）が描かれており、室内を表している。そして主人公がアストラベ（天球儀）を向けている先に太陽が輝く。顔が擬人化されて描かれている。太陽本体も光線もすべて黄金色であり、図4と比較して幾重にも放射されている光線はその量だけ明るさが強調されているのであろう。

続けられたのであったが、その折になって彼が言うには、「イスマ殿、タグウィール（日盛り時の、日中の休息）を取りませんか。陽射しが我々の脳を溶かしてしまいそうだし!」。私も同感で、「あなたもそう思っていましたか」と答えた。そこで我々はアラーウの木の茂みの方に寄って行った、その茂みたるやまるで髪の毛の房を垂らして飾り立てている乙女達のごようであった。それらと向かい合うようにアサル（タマリスク・御柳）が立っていた。我々はラクダ鞍を下ろして、食事をとった。（が意外なことに）ズー・ルンマ殿は食欲が無かった。食事を済ませると礼拝を共にに行い、それぞれが別のアサルの木陰に行き、昼寝をとることにした。ズー・ルンマ殿が横になったので、私も彼に見習って同じようにした。身を横たえたものの、私の両目を眠気がなかなか支配してくれなかった。

（Hama, 第7話 拙訳（1）p.256）

この事例も詩人ズー・ルンマの同行者と真昼間のハージラ（昼下がり 2-2-3を参照）に至るまでラクダに乗っての砂漠旅を敢行している描写である。白昼の砂漠旅は「陽射しが我々の脳を溶かしてしまいそう」となる。ハージラ、すなわち「日中の最も暑い時間帯」に旅を強行するとこのようになるものだ。引用中アラーウの樹が叙されるが、樹木砂漠地帯に生育する常緑樹で、外見が美しく、本文のように葉の茂みがどちらかに傾くと、乙女が長い髪を垂らした格好に見える。砂漠にあっては日陰を提供する絶好の材であるが、その美景からかジンの一種のグールの潜み場所ともいわれる。たとえグールがいたとしても、昼間は悪さは仕掛けられないとも。

「陽射し」は2-5-1の事例2で観た如く、「太陽の息子」イブン・ズカーウ ibn dhukaa' とも言われる。ズカーウ dhukaa' は、「激しく燃えるもの、熱さを掻き立てるもの」の意味から「太陽」にも転用されるようになった。この dhukaa' は shams と同義であり、女性名詞扱いでも同じであるが、陽射しの厳しさ、酷熱のイメージが先行する点で、中立的な shams とは異なる。また文法においても二段変化名詞とされているのも異なり、無標ではないことが推察できよう。しかしズカーウが「太陽」としてシャムズほどには汎用されるに至ってはいない。そしてそのズカーウ（太陽）の息子（ibn）が「陽光、陽射し」であるのも頷けよう。また一説ではズカーウは「太陽光線、陽射し」にまで広く意味して、その息子とは転じて「明け方、暁」を意味する、ともされる。

「陽射し」はごく普通にはシュアーウ shu"aa" と言う。これを動詞化した語がアシャッ ashah"aa" で、「太陽がその光線シュアーウを放つ、四方に放射する」となる。太陽はそれが描かれるとき、周りに光炎が描かれるのは多くの文化圏で共通しよう。面白いのはその回りの光炎は陽射しの一つ一つであるが、それをアラブは矢 (sahm) とも「槍」 rimaah とともに言い表す。放射や陽射しの類縁で弓矢の「矢」とも「槍」ともするところが暑熱地帯特有の発想であろう。それほどに刺し貫く陽射しは矢や槍の一突きほどに強烈なのである。「陽射し」は単数ではシュアーウ shu"aa"、そして複数形は少数がアシッ ashah"aa"、多数がシュウウ shu"u" およびシアウ shi"aa" である。そして「陽射し」シュアーウ shu"aa" は、語根動詞 /sh/" から派生しており、その語義は「散りばめる、振り撒く、放散する」であるから、太陽光線が己の光線を当たるところ隈なく照らす様を言ったものである。

快晴なのに陽射しを持たぬ太陽が昇る…ハディースにある「太陽その日の朝昇り来たる、されど陽射し伴わぬなり」inna sh-shamsa tatlu"u min ghadi yawmi-haa laa shu"aa" la-haa. 異常事態である。この後大地が裂け、山々が吹き飛ぶ「最後の日、復活の日」の序を表しているのである。

日向はディッフ dihh と言っている。「大地の表面の当たる陽光」、「大地を占有する太陽の光」の義なのである。拡大して「陽光」さらには「太陽」そのものの意味にもなる。「あなた方のうち誰もディッフ（日向）とズィッル（かげ）との間に座ることはない。そこはシャイターン（サタン）の座る場所だからである」laa yaq"udanna ahadu-kum bayna d-dihhi wa-z-zilli fa-inna-hu maq"adu sh-shaytaan とはハディースからの引用句である。サタンは身体の半分は陽光（＝光）でできており、半分は陰および闇でできているからである、とされる。昼は従って日向と日かげ、その間が霊サタンの活動場所。それ故に、紛れる者であり、凝集すると視認できる個体になり、拡散すると目に見えない霊に戻ることになる。さらには日向が優勢の時は善行もなすが、影の部分が多いと悪事をなす。夜は陰が主体となるため、活動を活発にする。そして悪の誘惑、人間をそちらに誘い込むというわけである。また植物についても日陰で育つものには毒性がまし、日向で育つ果実には熟成度が増し、甘さを濃くする、とされる。「日向と日影との間」、その間は肉体持つ人間には、居場所とし

ては不可能である。サタンは霊であるから、また天使のように「善的」ではないので、影が生き様に影響する。この居場所はサタンだけではない。霊的で悪事もなすもっと一般的な創造物ジン jinn (精霊) の屯する場所でもあるのだ。「日向と日影との間」は〈場〉のみではない。そうした〈時〉でもある。もっと一般的には「紛れ時」の時間帯である。我が国でもそうのように「夕間暮れ＝夕紛れ」「タソガレ＝誰ぞ彼は」、「カハタレ＝彼は誰ぞ」、「朝間暮れ＝朝紛れ」などの時間帯はジンが俗界に跋扈する時なので、アラブの民衆は注意と用心を欠かさない。

3-1-2 日射し「朝日」と「夕日」について

「陽射し」の代表語シュアアウ shu"aa"の他にも、午前の陽射しと午後の陽射しとを分けて陽光を対にして表す用語がある。いわば「朝日」と「夕日」であり、前者はガザーラ ghazaalah と、後者はジャウナ jawnah がそれである。属性である「陽射し」に関しても、本体「太陽」同様、朝日・午前の陽射しの方が夕日・午後の陽射しよりも勢いがあり、吉兆が出る。そう信じられているのは、丁度新月から満月に向かう「白月」時の方が、満月から新月に向かう「黒月」時よりも勢いがあり、善なることが多いとされるのと同様である。生殖においても、家畜の交尾、人間の性交においても。

夜明けから陽光がさしかかる日の出にかけては次のように叙される。美事な表現である：長老は「サマル（夜会）」の（話題の）外套を再び広げたのであったが、その外套はイエメン産の「ヒバル」外套に劣らぬ（ほど話として素晴らしい）ものだった。そして遂に「夜明け（タンウイール）」が近づき、朝の「明るさ（ムニール）」が闇をつん裂く頃を迎えた。（月夜と闇夜の）「混合（シャワーイブ）」が支配した一夜を明かし、今や夜の「尻尾（ザワーイブ）」が灰色に変わる頃となった。「幸せを約束する星々（スワード）」が支配を終え、「明け方の枝（ウッド）」がその光りの蕾を開く頃になった。そして「日の出（ガザーラ）」の（光線の作り出す）角が（空に）ほの見える段になった。すると、アブー・ザイド殿は「ガゼル鹿（ガザーラ）」が跳躍するように、ひょいと腰を上げた。

(Har.5話 拙訳 I 182)

ここでの「日の出」の原語 ghazaalah は、具体的には日の出の際の太陽のみに用いられる語で、同じように「入り日」の太陽には jawnah が用いられる。太陽は、日中の位置によって、他に八つの呼称を持っている。なお、「ガゼル鹿」の原語も「日の出」と同じで、同音異義技法ムスタウファー・ターンムを形成している。「日の出の角」qarn al-ghazaalah とは太陽の光線の放射する様を言う。アラブはこれを「角」と言い表わしている。

事例：若者（質問して）、「ガザーラ（ガゼル鹿）が現れる前に犠牲行を済ませてしまった場合は？」。

ファキーフ（法学者）、「（ガザーラが「昇る太陽・朝日」の意味ならば、犠牲行は午前の遅い時間帯になされるので、日の出前ということになり）無効です。（犠牲としてではなく）肉となった羊として（売れるでしょう）、疑いも無く」。

(同上書 第32話 II 416)

引用文のなか、ガザーラ ghazaalah は「ガゼル鹿」と「朝日」の同音異義語であり、そのコノテーション（両義性）を突いて法律問答をしているわけである。

「朝日」の語ガザーラ ghazaalah は「日の出から午前中の陽射し」を指しているが、さすがに「昇る太陽・朝日」、「旭日」だけのことはある。その一端ではあるが、全体を表す換喩ともなっており、この語は「太陽」の同義語の一つを形成している。上の事例で引用したようにガザーラ ghazaalah が「ガゼル鹿」との意味も持ち、巡礼月10日目の犠牲祭についての決まりについて、犠牲の対象と犠牲

を捧げなければならない時間帯を^な縋い交ぜにして、若者が部族に巡回してくるファキーフ（法学者）に問い質しているわけである。「朝日」ガザーラ ghazaalah の語根義はガズル（紡ぎ、織物、編み物）のほうに關与して、そちらからの派生であるようだ。語根√ Gh/Z/L は糸、紐、綱など線状のものを「縫る、編む、紡ぐ」である。そして朝日の陽光の放射がまっすぐに直射するところから「撚糸、織り糸」と捕らえられての発想から生まれて、「朝日」がガザーラ ghazaalah と呼ばれるようになった。従って「朝日」に関する派生の意味場はこの語根√ Gh/Z/L からは、ほかに何も形成されていない。

「朝日」ガザーラ ghazaalah の〈陽〉光に対して、その〈影〉として対応するのが、後述する狭義でのジッル zill である。

「陽射し」が強烈になって来ること、強烈になる (ishtadda al-hurru) ことをアラブは太陽が怒り出す、怒っていると言い表す。タアッジュム ta'ajjum というのであるが、これは擬人化したもので丁度人間が怒って熱くなる、熱くなっている状態を、カンカンと照る（＝怒る）と喩えたものである。さらに陽射しが高くなり、強烈になって熱さが耐えがたく、苦痛になってくることはガンム ghamm と言う。太陽というよりも大気全体が「耐え難き暑さ」となっている、これがガンムである。「あなたは我々に「耐え難き熱さ」をもたらしてくれた！」maa aghamma-ka alaynaa ! とは非道い悲嘆・苦痛・悲しみをもたらしてくれた、と喩えられるがその意味となるのも推察できよう。

日射しが強くなり、炎暑、燃え立つ火のような熱さをハドム hadm と言うが、日射しがその炎の如くなる様をイフティダーム ihtidaam と言っているし、さらにはものみな日向^{なた}のものを「照射する、焼け付ける」程の光線、これをサクラ (saqrah) と言う。そして日射しが射す熱線、これをサラ・サラ sarah・sarah と擬音化する。名称自体はサッラ sarrah という語で表わすが、日本語ではサン・サンは温かみがあるが、カンカン照りのカン・カンとかジリ・ジリとかの擬態語はそれよりよ程強烈ではあろう。

強烈な陽射しを浴びると、それはラドガ ladghah（突き刺し）と呼ばれ、人体を光線が矢のように槍のように突き刺して、頭に影響が出てくる。この状態の人が日射病・熱射病に近くなることをサーミフ (saamih) とかサムーフ (samuuh) とか言われる。いずれも太陽光線で「焼け付き、陽焼けで身体に変調を来す」ことである。

一方、「入日・夕日」を指しての語はジャウナ jawnah と言う。ジャウナは色彩語、「黒い、赤黒い」のジャウヌ jawn からの派生形であり、語根動詞も√ J/ W/ N は「色が黒くなる、暗くなる」から由来しているので午後遅い時間帯の陽射しを指していることが分かる。「白昼」色から西に傾き陽射しが弱まり白が黄色になりやがて「真っ赤な太陽」になる。午前の太陽ガザーラがあまりに強烈的な白色なので、午後の陽光は時間が経つと次第に弱くなり、そのため太陽は黒くなるとのイメージが伴っているであろう。これが狭義のジャウナ jawnah である。実際の時間帯はもっと広く採られて「午後の陽射し、斜陽」であって、「朝日、午前の陽光」ガザーラ (ghazaalah) と対義語となっている。

また強烈的な日射しが峠を越して弱まってゆくことを、アラブは「熱湯が冷めてゆく」ようになると喩えてハリーク (hariiq) とかアリーク (ariiq) またアフリーク (ahriiq) と称している。活動の時となり、喜ばれるのである。

「夕日」ジャウナ jawnah の〈陽〉光に対して、その〈影〉として対応するのがファイウ fay' である。これについては以下の節で述べる。

第3-2節 「日影」、「日陰」

3-2-1 「日影」、「日陰」について

「かげ」といっても二種あり、「影」の方は「影法師」などと言うように光源とは反対側にできる物体の黒い像であり、「陰」は「木陰」などと言うように光源などを遮っている物の後ろや裏の部分を使う。英語では区別なく shadow, shade と言っている。恐らくわが国も和語では区別はなく、漢語が入って来て区別するようになったのであろう。暑熱乾燥地帯だけにアラブ世界は「かげ」に対しても文化を開示している。太陽の「影」は日中の時間帯の指標とされる、日時計もそうのように。アラブでは「日向」をディッフ *dihh* と言って、「日かげ」をジッル *zill* として対語にしている。アラブは「かげ」*zill* は同じ黒いものでも「闇」*zulmah* とは認識を別にしていて。一方太陽の「陰」は人間や動物などに「物陰」「木陰」などとして利用される。木陰として柘榴の木陰の例を出しておこう：

事例 樹陰：

排泄後身を清めた者 何と多く我を呼びて話し合い持ちしことか

そに関し教養の欠けること 彼にも我にもあること無し (*bi-l-'adabi*)

何と多くの若ラクダ^{ひざまづ}跪かせたことか 日陰作る柘榴花の下で

そのラクダ アラブ産であろうと外国産であろうと (*"urubi*)

かくなる人の何と多くを見しことか 喜んだかと思えば

すぐに大泣きし雨雲の雨滴ほどに涙流す (*ka-s-suHubi*)

(Har. 44 話 拙訳Ⅲ 227)

暑熱乾燥地帯であるから、昼間は太陽が常に顔を出している。冬季などに曇天の時、雨天の時もあるが、ごく限られた時間帯であり、それが一日中続くということはない。太陽とその光線が何時も見られる世界。昼の世界は陽光、陽射し、日影、日陰に彩られている。

「かげ・影・陰」の代表語はズィッル *zill* である。複数形であるが三種あるところも暑熱的特徴と言えよう。少数複数 *azlaal*、多数複数 *zilaal*、*zuluul* とされている。木陰そしてその利用など連想してみるとこの複数観が想像できよう。「私は昼の影がある間 彼の所に留まった」*baqiytu "ainda-hu zilla n-nahaar* のように、「陽射しがある間、昼の間」と同義ともなる。「昼の影」を「昼の陰」と表すと「物陰」となるのもっと具象的になり、〈住所〉となり、テントの中とか建物、屋敷の中のような意味合いになろう。「かげを作る、かげを広げる」との動詞はズィッル *zill* (かげ) から派生的に作られ、ザッララ *zallala*、アザッラ *azalla* と言う。「樹が私に陰を作ってくれた」*azallat-nii al-shajarah* のように用いる。「屠体肉に陰を作る」*zallala lahma l-jazuur* とは肉用ラクダ (*jazuur*) を屠体して、その肉を腐らないように日陰に置くこと、日陰干しにすることを言っている。有名な言い回しにザッララ *zallala* を受け身形に用いた「タマリスク (御柳) の樹上に陰も作られない肉があるぞ」*"ala l-athalaati lahmun laa yuzallalu* がある。肉＝死体であり、殺された者の死体が何の埋葬もされずに野晒しになっていることを言っている。これを聞いた身内・同族の者は、手厚く葬るために急ぎ現場へ向かうであろうし、敵方の者は手柄話として誇らしく、自慢げに言うことであろう。また他の派生動詞「日陰に難を逃れる」ことはイスタザッラ *istazalla* とかイスタズハラ *istazhara* と言っている。暑熱地帯の昼では日常に用いられている。2-5-3の事例「この白昼の猛暑を避けるべく、致し方なく日陰に難を逃れたのであった」にもこの語が用いられている。

「陰」は「頼りとなるもの」である。従って「陰にあるもの」は、頼りとする物体の背後、ないし下にいるために「保護されている」ことになる。「その異邦人は部族の影で三年過ごした」"aasha al-ghariibu fii zilli l-qabiilati thalaatha sanawaatin とか、「統治権は大地における神の陰である」al-sultaan zillu llaahi fi l-ardi、あるいは「彼は自分の陰に私を置いてくれた」ja"ala-nii fii zilli-hi の如くに言い表す。同様に陰は「面倒、負担」とも喩えられ、「陰淡い者」とは「面倒をかけない」となる。その事例：

そんな時私達の家の扉を叩く音が聞こえた。私が、「何方^{どなた}でしょう、夜の訪問者は？」とすると、「夜の使いです、その伝令者でございます。空腹に打ち負かされ、追い立てられている者でございます。異国の者で、乗る瘦せラクダも疲労困憊しております。我が生活は辛苦の中にあり、我が二人の雛^{ひよこ}（＝幼い子供）は砂漠を隔てた遠くに置き去りにしたまま。客となるはその陰淡い者にございます。彷徨^{さまよ}い出でたるは、一塊のパンを求めていること。皆様の何方か、客を迎えて下さりませぬか？」
(Ham, 第37話 拙訳 (3))

引用文中「客となるはその陰淡い者」dayfun zillu-hu xafiifun とあるが、影 zill とは「寄る辺とする者、頼りとする者」。それが淡い、軽いとは、面倒・負担をあまりかけないことを言う。陰の濃い者・重い者 thaqil l-zill とはこの反対で、「負担が重い、面倒を掛ける」の義となる。

「まるで彼の顔は石のかげのようだ」ka-anna-maa wajhu-hu zillun min hajar とは「顔が陰で黒い＝冷酷無情、恥知らず」のことを言う。「かげ」に関して言えば、アラブの俗信では石に出来るもの程、濃い、黒いものはない、と信じられている。それ故に「顔」が対象の場合、わが国では石が鉄に代わる「鉄面皮」が類似していよう。これ故に「石陰」は「もっとも陰が濃いもの」の意味で、「陰」ズィッル zill の派生形、比較形容詞アザッル azallu と言われる。諺「石の陰ほどに濃い陰の物は無い」laysa shay'un azalla min hajar などと言われている。

同じく我が国では「速く過ぎ去る」例えは「光陰矢の如し」と言っているが、アラブでは「狼のかげの如く」ka-zilli-al-dhi'bと言表す。「瞬時に過ぎゆくもの」は狼であり、我々がそれと気づいて見る時はその「かげ」だけである、というわけである。

興味深い言い回しに「彼の影が白日のもとに消された」dahaa zillu-huがある。即ち「(白日の下において)彼は自分の影を無くした」＝「彼は陽に晒され果てた＝死んだ」の意味となる。影の存在はそのものの生存を表わしている。わが国でも「同行二人」は生きた影であろうし、「影が薄い」はまだ生存中であるが、「影が無くなる」とか「影の無い人」は「亡くなる」との縁語になる。彼我の〈影〉に対して通ずる観念であろう。同じく「おおアッラー、あなたの影を我らより無くならせませんように（＝助けたまえ）！」laa adhaa llaahu la-naa zilla-kaの嘆願とか、「ヤツの影を奪いたまえ！」adhi llaahu zilla-huの呪いなどの言い回しにも用いられる。我が国の上に述べたお遍路さんの「かげ」とふたり、アラブ版「同行二人」は遍路道ではなく、同じ旅とはあるが、太陽の照り付ける広大な砂漠道である。「旅人おのが影に従い行く」yatba"u saafirun zilla nafsi-hiがこれである。さらにアラブでは足となるのはラクダである。「自分の影を履物とする」inta'alat zilaala-haaと言表す。動作主も人間の旅人ではない、足となっているラクダたち(ibil)であるところも面白い。朝に、その影が西に長く伸びても、真昼に蹄の下で見えなくても、午後にその影が東に移行しても、ラクダの蹄を起点に「同行二人」が砂漠中をゆらゆらと行くことになる。「我が影はあなたの影を離れることはない」laa yufaariqu zillii zilla-kaとは、「私の存在や意見・主張はあなたのそれらの影の如

く同行して離れることはない」の意味となる。

わが国では「影が薄い／濃い」と言っ、その人物の存在感・重要度を言い表している。既に述べたことであるが、アラブの方は「影が重い／軽い」も含めて「負担、面倒」などの換喩として言い表す。そして「影が重い (thaqiil)」人は「面倒な、厄介な」人物を、「影が軽い (khafif)」人は「快活な、親和する」人物を指している。本節の事例で見た如く、「影淡い者」とは「迷惑・面倒をかけない人」のことを言う。「あんたは他人に面倒をかけるだけの人だ」maa anta illaa thaqiilu z-zill などと言われる。我が国の「気のおける人」、「気のおけない人」と通ずるところがあろう。

以下の見事な詩句は、旅のラクダが謳われる。己の乗る愛駝に昼旅の強行をしいて、真昼「かげ」が全くなり蹄の下に隠れても、なお旅を進めようやく水場に至ってくれた感謝が込められている。旅のラクダはナーカ（雌ラクダ）、それ故代名詞は彼女である：

漸くのこと水場に至れり 彼女己の影の上を踏みながら進みて

qad waradat tamshii "alaa zilaali-haa

太陽容赦なくその頭部の天頂を熱し溶かしながらも

wa-dhaabati sh-shamsu "alaa qilaali-haa

(Lisaan XI419)

午前中は西に伸びていた影が、正午頃になり中天に至ると己の真下に来て、己がその影を踏む。やがて午後になると東の方に伸びて行く。その間の熱暑は正午過ぎには「頭の天頂」を容赦なく光線の矢を射続け、頭脳が溶解するほどになる。ラクダに騎乗する人間もさらに過酷となろう。

同じように「影と競う、影を追い越す」baaraa zillaan との言い回しがある。人・鳥・獣共に急ぎの歩様を言っているが、後者の「影を追い越す」の意味合いには想像しにくい、「自信や誇りを持った歩き方」の例えだとされている。

zill 「影」＝「負った状態・状況」とも解釈された。「己の影から位置を移す」intaqaltu zillii とは置かれていた状況から転換する、他の状態に移る、の意味で用いられる。

「彼は日と風に当たるものとを伴てやって来た」jaa'a bi- d-dihhi wa-riihi (Ask. I 321, May. I 161, Zam. II 39) とは「彼は陽に当たるものと風に当たるものをもたらしした」。「陽と風に当たるもの」とは「野外で陽光や風雨に晒され生育するもの」を言い、具体的には「農産物、家畜類」のことを指している。従って「資産・財産・富をもってやって来た」との意味となる。「彼は陽に当たるものと風に当たるものの中にあつた」kaana fi d-dihhi wa-riihi とか、「彼は陽に当たるものと風に当たるものから死んだ」maata "ani d-dihhi wa-riihi とかの言い回しもその意味はお分かりであろう。後者の「～から」は前置詞'an が用いられており、この場合「～を残して、残しながら」の意味となる。

「あなたは日向にいたのではなく、日陰にいる考えを持つ人だ」anta muru'un ra'yu-ka fi l-kinni laa fi d-dihhi と言う言い回しがあるが、物の見方を正面から捉えるのではなく、横やはずから捉える人のことを言う。よく言えば「慎重な、周到な考えをする人」、悪く言えば「憶病、へ理屈をこねる人」。「日陰」と訳した原語 kinn は、元来は「覆う隠すもの、ヴェール」であつて、それが「日陰」に転用されて用いられている。

さて、以下は「かげ」zill が比喩、たとえとされている例である。

動物のガゼルは害獣や獵師に悟られないために、一旦利用した木陰は二度と用いない・戻らない

と信じられ、それは「ガゼルの木陰」 *zill z-zabiyyi* と言われた。「私は彼のもとを去った、ガゼルがその木陰を去るように」 *atruku-hu tarka z-zabiyyi zilla-hu* との言い回しは「私は彼を見捨てた、ガゼルが木陰を見捨てるよう」との意味合いである。

それでは「夜のかげ」 *zill l-layl* とは？ と問われて、夜には「かげ」があろうはずがない。先ほどの「石の陰」の連想をするわけであり、夜は闇で黒い。その闇の黒さがさらに重なる。「真つ暗闇」のことで「彼は夜の陰の中 我らがもとに來た」 *ataa-naa fii zilli l-layl* の如くである。

「昼の影」 *zill n-nahaar* とは？ 日の出前と日没後の明るさのこと。太陽が昇るとすべてを白日の下に晒す。白日となる前、白日の終わった後、両者の天空が白⇄赤黒く染まる、即ち昼の始まりと終りの天空それを「昼の影」と呼んでいるのだ。*zill* (かげ) を元として、派生語で同じく陽光を遮る物でも「天空の雲 (*sahaab*)」などの意味を持つザラール *zalaal* (*zilaal* とも) とかが用意されている。それでは「雲のかげ」 *zill s-sahaab* とは？、と言うと一つは同格の「の」であり「雲というかげ」となり、「太陽を隠す雲」のことである。他は「雲の重なり」、「雲間が重なる雲、重なって影のようになる黒い部分」のことを言う。雲が重なっている天候「曇天」のことは派生形容名詞ムジッル *muzill* (陰なす物) と言う。「海のかげ」 *zill l-bahr* とは、その影によって後ろのものを隠して見えなくしてしまう「波」 *mawj* (pl. *amwaaj*) のことである。

「かげ」の代表語ズィッル *zill* であるから、語根動詞 *zalla* < *zalila* も意味の関与がある。*zill* < 太陽のかげ> が出ている間、すなわち「昼の時間帯に入る、昼の間に行く」である。〈太陽〉及び〈陽射し〉が作り出す〈かげ〉は、矢張このように意味の中心が〈昼〉になる。それから意味が外延してゆく。「昼過ぎす(ところ)」と対になるのが、我々の知るバイト (*bayt*、テント、家) であるとされる。後者では〈夜〉「過ぎす所」が意味であるが、対語 *bayt* は語根から〈夜〉と関与した意味層が展開される。

派生形で「日除け」を意味するのはズッラ *zullah*。太陽から頭上を遮るもので、帽子、木陰、囲い、我が国の夏の海小屋のような小屋も含まれる。布切れやターバンの端で陽光を遮断する「小物の日除け」は *zullah* の指小辞ズッライラ *zullaylah* が用いられる。また家の軒先や庇なども「家の日除け」の意味でズッラ・ダール *zullah al-daar* などと *suddah* と同義で用いられる。同じく陽光を遮る物でも天空の雲 (*sahaab*) などは別の派生形ザラール *zalaal* (*zilaal* とも) とかが用意されていることは先ほど述べた。

派生形容詞でザリール *zaliil* があり、「陰を作っている、陰になっている」の意味で、同語反復のようだが「陰を作っている陰」 *zillun zaliilun* とは「陰中の陰」の意味となる。「陰が失われること無く常にある、コンスタントに陰を作っている所であり、シカモア (イチジク桑) やアカシア類のように葉が茂った大きく広い枝を広げた大木やナツメヤシなどの林、森などがそれである。次に詩句を紹介する。そうした白昼炎熱の中、はるかに緑の黒い一地点が見えてきた、木陰を提供する「陰を作っている陰」 *zillun zaliilun* なのだ。そうした状況を見事に映した描写である：

(遥かに) 見える木々 白昼の中にありて正に「陰作りたる陰」ぞ

hiya l-zillu fi l-harri haqqu l-zaliil

その情景の素晴しき様 何にも増して善なるかな、この上無き美しさかな

wa-l-manzaru l-ahsanu l-ajmal

(Lisaan XI-417)

「陰作りたる陰」zillun zaliilun が、さらに意味拡大を見る。聖人の「後光」的な宗教的な意味合いも持つ。神に守られる聖者や修行者は、その周囲には太陽の陽射しが熱射しているのに「陰を作っている陰」が架かっている、と見られる。預言者の「バヒーラー伝説」に出て来るキャラバン行で、ラクダの歩みと共に預言者の頭上に日陰を作って、太陽の直射が当たらなくさせていたその陰が「陰を作っている陰」zillun zaliilun なのである。

派生名詞ザラル zalal とは「陰にある溜まり水」である。「ぬかるみ」的なものを指しても言われるが、もっと特化された我が国の「弘法井戸」的な意味合いも持つ。樹や岩場が囲う様に陽光から守り、冷涼な水を湛える、わが国でいえば弘法杉の根本の井戸のような水。これもザラル zalal とって尊ばれる。

白昼、強烈な日差しの中を行くラクダも己の陰を自ら作り出している。太陽と向き合う背中、そこには瘤の脂肪分あって身体全体の影になり、身体全体に行きわたる血管、その温度適用が38～39度まで体温を上げ身体^{こぶ}の陰となっている。脚と胸にある瘤は地面の暑さに対しての陰となっている。こうした関連上もっとも興味深いのはラクダのかげのことである。あの目とかげが結びつく。あの黒い大きい眼球、幾重にも長い睫で保護されていて瑞々しい。アラブは「ラクダの目は陰の中にいる」istazallat "aynu l-ba"iir とって、ラクダの鑑識とされている。目蓋の上の庇が突き出ていればいるほど、眼球の収まりが奥まっております、陰が作られることになる。そうしたラクダは見目も良く砂漠行に強く、陽射しに、風砂に対処できるラクダであるとされている。

3-2-2 「朝日かげ」「夕日かげ」

「かげ」の総称語はズィッル zill であった。「日影」、「日陰」、で全体を指示している。しかしファイウ fay' という語があり、それと対峙されるとズィッルは「〈午前中の、昼前の、朝の〉日かげ」に限定されてしまう。すなわち午前中〈太陽が西に落とす〉「かげ」「朝日かげ」がズィッル zill であり、午後〈太陽が東に落とす〉「かげ」「夕日かげ」がファイウ fay' なのである。「太陽が西に傾き、それに伴ってできる日かげ、午後の、昼過ぎ以降の日かげ」これがファイウ fay' である。ファイウの語義は陽射しが南中点・正午を期して、〈かげ〉が逆に「回る、変わる、戻る」からである。これがファイウ fay' の語根√F/Y' の動詞ファーア faa'a < faya'a の意味である。その原義を反映してフィア fi'ah との時を表示させる派生語がある。「一時・一刻」を意味している。「かげ」に関連付ければ、faa'a とは「陽射しの影が西側から東側に回る、変わる、移行する」となる。この動詞 faa'a の強調動詞が fayya'a であって、「昼の陽射しがもっとも熱く強烈である」が一方に、それと対照的に「かげの方は黒い色を増し一層濃くする、涼しくなる、木陰などは特に」、との意味となる。「樹は多くの濃い影を落とす」fayya'ati sh-shajarah などと言いまわす。この再帰派生形 tafayya'a は「ファイウに難を逃れる、身を隠す」となる。昼日中猛暑のなか黒く濃い木陰があったならば人誰しもこうしたファイウ fay' 目指して難を逃れることであろう。

ファイウ fay' が「午後のかげ」なのに、イスラム史では重要な用語となっている。即ち「戦利品」の意味として、軍事やジハードなどのイスラムの歴史や文化語としてガニーマ ghaniimah とともに頻出する。ファイウ fay' = 戦利品となるのは、やはり語根義が関与しており、影が正午を境にして全く逆に移るように、対象物である〈戦勝品〉の所持が一方の敗者の当事者から全く異なる他方の戦勝者に移行するからであるとされている。イスラムの征服期、拡大期によく目にする用語である。

「午後のかげ」を陰として地面のいわば「夕日かげ」として、ファイウから派生した語にマフユア mafyu'ah またはマフヤア mafya'ah がある。アラブでは「夕日かげ」を長く引きずる者はよくない、愚か者、怠け者と見做される。夕日を受けて昼の仕事の後始末に、迎える夜を安逸に過ごすためにも忙しく働かねばならないのに、何もしていないと、夕日かげが伸びたままになっているからである。「夕日かげを長く引きずる者」はマフユーウ mafyuw'u と言われる。

第3-3節 ^{かげろう}陽炎とその精「蜃気楼」

太陽の陽射しで関わって、砂漠で欠かせないもの、^{かげろう}陽炎がゆらゆらと立ち、結晶してゆく。それが蜃気楼である。わが国では「海市」などと呼ばれ、富山湾のそれが知られているが、環境を反映して基本的には〈海〉に出るものである。アラブ世界ではむしろ陸中に、しかも砂漠の中に出て、わが国以上にポピュラーである。太陽光線が無ければ生まれないもの、大気の変化がなければ生まれないもの、それが陽炎であり、蜃気楼である。陽射しが大地に生み出すもの、それが我が国では「糸遊」とも「かげろい」とも呼ばれ、仏教では摩利支天信仰とも深くかかわる「陽炎」である。我が国では陽炎の立ち昇る様は「ゆらゆら」、「きらきら」との擬音であるが、アラブではラウラウ ra'sa' と擬音化されている。この擬音から陽炎はラウラア ra'ra'ah と名詞化された。陽炎は他にもワムダーン wamdaan（原義「弱々しい光」）とも言われる。その陽炎の精である蜃気楼は、見かけだけのもの、空中の楼阁、騙しの水やオアシスと捉えられている。

「蜃気楼」と言えば、砂嵐や竜巻と共に筆者には忘れがたい数々の思い出がある。その一つは1970年代、半島東岸のダンマーンから首都リヤードに向かっていった折、右手はるか前方に浮いた形で城壁に囲まれた土色の建物らしき一群がほの見えたのである。目を凝らしてもはっきりとは見えなかったが、陽炎のなか少し宙に浮く形でほの見えた。長大さにも幻想さにも驚いたものであった。またイエメン系ユダヤ人オフラ・ハザの Fata・Morgana の歌も忘れがたい。Fire in the sky/Colors flying through her mind/Desert touches the sky/Here at the place where she will die/She is looking far far away/It seems there's no escape/From a prison without bars/Only to follow the bright star/She's running all the way/Fatamorgana/Only yesterday/Fatamorgana… ラクダの歩調を基調リズムとしてイエメンからパレスチナ（イスラエル）まで目指した、そのリズムの体感が忘れられない曲である。Fata・Morgana とはイタリア語で「蜃気楼」のこと。母親に連れられて近親縁者と共にただ従ったオフラ・ハザにとっては、苦汁に満ちた砂漠の長旅は原体験であり昨日の蜃気楼のようであった、と謳う。英語の歌詞の中に、アラビア語も調和させるように入れ込んだ歌詞になっている。（筆者にとっては啓示を与える聖霊のようなオフラ・ハザについてはエッセーで書いたことがある。「オフラ・ハザ イエメン系イスラエルの美人歌手」『月刊健康』379号 平成5（1993）年3月 pp. 36～39）

蜃気楼はアラビア語では三語が知られている。①サラーブ saraab、②アール aal、③ヤルマウ yalma"u である。現代に至るまで最もポピュラーなのは①サラーブ saraab である。これらの意味素を調べると、アラブの「蜃気楼」観が浮かび上がってくる。順に〈流れる水〉、〈飛び出ているもの〉、〈輝くもの〉である。もう少し説明を加えよう。①サラーブ saraab は、わが国（と言うより中国で）は「蜃（大蛤）が気を吐いて造り上げた楼」と言われているのとは相対的に、「見せかけの気ままに流れる水」、「大地が引き裂かれ、そこから疑似的な水が流れ出して映し出されたもの」とされて

いる。わが国の例として「逃げ水」を連想させよう。それを大規模にしたものと理解して良いだろう。サラブには複数形が欠如する。②アール aal は、語根が awwal（最初、第一）と同一であり、「平たい部分に突きだしている／飛び出しているもの」であり、砂漠の一地点が他より浮き出ておりそこに何か映し出されていることから由来している。③ヤルマウ yalma"u は「そこだけ他とは違いポ一つとかすんで揺らめく中に、なにやら水やオアシスなどが輝いて見える」ところからの命名であると推定される。

砂漠の中であるから、その成分や塩地（subhah）など空気の層の違いで蜃気楼は大規模に広がる。ゆらぎの中に明瞭でないだけに己の希求して止まぬものが映し出されることであろう。やはり多くは①サラブ saraab の語義が反映する見せかけの水やオアシスと見做されることが多い。事例：

あらかじめ我が^{かた}騙りとすべきことを

そのまま語り聞かせしに、

水浮かべし蜃気楼を本物と

見なす程のお目出たき人かな！

我よもや思わざりき

我が狡猾さの隠せおおせるとは

我が意図するところが

疑い生ぜずして済みおおせるとは！

Hariri 第5話 拙訳（平凡社版）I 184、原書49

そしてその延長戦に巨大な、長大な蜃気楼は、砂漠と通底している見せかけの海や大河が連想されている。アラブのある詩人の詩句であるが：

「ラクダ^{かた}轡に乗る女性は蜃気楼のルッジャ（深海）の中を泳ぎ行く」

と謳っている。詩人の恋のかなわぬ女性が遠く去り行くのを見守る情景を未練をもって描いたもの。「蜃気楼」と「ルッジャ」とは「深い＝遠い」ことと「手の届かぬ」ことをも含意させている。砂漠の中に昼間の陽射しを受けて去って行く女性。ラクダも轡も縦長に揺れながら進む。その一步一步は海や大河の中を泳いでゆくように揺らめいている。印象的な詩句である。

蜃気楼のなかでも砂漠の中に＜飛び出ているもの＞を特徴とする②アール aal であるが、建物や高い樹木が、そしてオアシスのナツメヤシの林などが想定されよう。その事例を出しておこう。

善行をなし、礎石を落成式まで

積み上げる君侯の如何程あるや？

されば蜃気楼の映像に騙さるなかれ

疑い不安あるものに深入りするなかれ

甘美な夢を見し後に目覚めて

驚く現実を悟りし者の多かりき。

Hariri 第6話 I 212 原典60

蜃気楼が＜輝くもの＞③ヤルマウ yalma"u とされるのは、水が反射してきらめくことが多く、その意味でも①サラブ saraab ＜流れる水＞との関連も大いにあるわけであるが、他にも金属やガラスが反射している場合も多い。後者の場合＜飛び出ているもの＞である②アール aal との関連もあり、重層的である。

事例1

「おお低地に揺らめく蜃気楼たる皆さん、窪地に光る御影石たる皆さん！ 密談なさるとは一体何事です？ 恥ずかしい気持ちがあれば、そんなことはなさらないでしょう。まるで重い負担を背負ったとでも、ほんのちょっとしたことで済むことなのに！ 要求が一国を差し上げよとでも、ほんの衣一つだけなのに！ あるいはカアバを包むキスワ（黒い垂れ幕）を催促されたとでも、死体一つを包む経帷子だけなのに！ なんとまー、岩の湿り気の無さよ、石の枯れさ加減よ！」
Hariri 第20話II 147、原典173

「低地に揺らめく蜃気楼たる皆さん、窪地に光る御影石たる皆さん」：いずれも見かけだけで、実物で無いものの喩え。前者は「水」に対する、後者は本物の「金・銀」に対する。

事例2

アッラーはムハンマドに限りない栄誉を与えられ、彼の魂を平安の館（＝天国）に導き給う。彼の高貴なる家族と一家に慈悲垂れんことを、蜃気楼が輝く限り、ダチョウが軽快に走る限り、新月が到来する限り、「新月到来」の叫びが聞こえる限り！

Hariri 第29話II 340、原典247

蜃気楼はここでは輝かしいものの例えとされている。蜃気楼がアラブでは、その名称分析から〈流れる水〉〈飛び出ているもの〉〈輝くもの〉との意味合いがあることが分かった。さらに用例からして、〈見せかけ、有名無実なもの〉、〈壊れやすい、繊細なもの〉との意味合いも持つことも理解できる。

さらに前者の例として、事例1：

ある商いの旅で砂糖菓子を商品として、サマルカンド目指して出かけたことがありました。その当時はこの私も背中^{まつすぐ}は真直に伸びておりましたし、活気にも満ちておりました。活力ある弓から快楽の標的を射抜こうとしていましたし、蜃気楼（＝儚い戯言行^{たわごと}）の誘惑に対しては若さから来る気力を頼りに（挑戦しも）していました。

Hariri 第28話II 312、原典235

砂糖菓子は qand、アラビア語から西洋に移入されてキャンディー candy になった。サマルカンド Samarqand は中央アジアのマー・ワラーア・ンナフル（川向こう＝トランスオクシアナ）の主邑。現在はウズベキスタン共和国の首都タシュケントに次ぐ第二の都市。

事例2：

この邸には鉄製の扉があり、その傍らに何人かの奴隷の姿が見えた。彼らが我らの事態の救出の梯子^{はしご}となってくれるのでは、水をもたらず釣瓶^{つるべ}の引き綱となってくれるのでは、と期待を膨らました。ところが、会った誰もが悲しみに打ち沈んでいるではないか！ その様子から身の破滅をした者か、捕虜にされた者かと思うほどであった。我々は声を掛けた、「君達、その悲しみ様はいったいどうしたことか？」。この呼びかけにも誰も返答する者はなかった。フンともスンとも一言も発しないのだ！ こうして彼らの灯す火が螢の火であることに、彼らの有様が砂漠の蜃気楼であることに気付かされたのである。思わず愚痴がこぼれ出た、「みんなの顔がひん曲がれ！ この下賤な者達の、期待された連中の顔が醜くなれ！」。

Hariri 第39話III 109、原典340

後者の例として：

するとどうでしょう、女性が立っているではありませんか、真珠の首飾りを手に持って！

その真珠の艶肌^{つやはだ}ときたら水滴のようで、その繊細さときたら蜃気楼のような。女性はこの首飾りを売りたいと差し出してきたんです。彼女から奪うようにそれを手に取ると安い値段で叩いて買い付けました。これはやがて明らかな利益が、十分な得^{もうけ}が出るやつですよ、神のお助けがあれば、旦那のお力添えがあれば！

Hamadhani (2) 340、aal

第4章 一日と旅

第4-1節 昼旅と夜旅

わざわざ「昼」旅と断っているのは、暑熱・乾燥気候帯に属するアラブ圏では、強烈な日差しを避け、夜間の冷涼さと夜空に展開する星月を頼りとして、夜旅の慣行がごく日常的であったためである。さらに遊牧民出のアラブは不可住地帯を長い間夜営を続けることから、遊牧の延長に旅は位置づけられていたし、商業活動も定期市や移動市、行商・商用旅行が主たる生業であった。都市定住民もまた、一か所に長居するのを嫌って移動する志向が現在に至っても存続している。

さてアラブの「旅」文化については、拙著『砂漠の文化』の中で、第7章「アラブにとって旅とは」で既に扱っている。その章の中では、「旅の持つ意義」、「旅の慣行」、「夜旅について」、「闇夜の旅」、「夜旅の休息」、「夜旅の再出発＝昼旅の出発」、「昼旅の休息」を項目として論究している。ここでは、このアラブの伝統的「旅文化」を、その後の資料などを用いて補っておくことにする。

砂漠の旅、果てしなく平坦な大地を進むとき、何が指標となったか、以下の詩はそれを如実に謳いあげている：

見上げ行け 昼旅ならば 山ツバメを

saamii samaamaati n-nahaari wa-j"alii

また夜間ならば 沈み行く星々を 夜旅の伴侶として

layla-ki adraaja n-nujuumi l-uffal

(Qut.186)

沈み行く星々nujuum uffal、西を示しているこれらの星々。それはその夜の間、ずっと天空から見守ってくれ、方位や時刻の頼りとなっていてくれたものである。いわば、四国巡礼の「同行二人」の如く、月影がそして星影が道連れとなっていたものである。こうした夜空の星月を伴として夜旅をせよと。これに対して昼旅は、山ツバメ samaamah（ここでは複数形）とはハトの一種で、ある一方向を目指してゆくカター鳥と同様、砂漠に在っては方位や時間を知る頼りになる鳥である。

第4-2節 夜旅の諸相

上の引用は『ナウの書』を記したイブン・クタイバからのものである。以下に同書から三点引用しておこう：

①夜旅を重ねる折 交替で行なう慣行あり

星々の東昇を目安に またその西没を目安に

kaanuu yata"aaqabuuna idhaa saruu

bi- tuluu"i nujuumi wa-ghuruubi-haa

②ある星 西没するたびに、乗って旅立つ者あれば

ラクダから降り立つ旅人もあるもの

kulla-maa gharaba najumun,
rakiba waahidun wa-nazala aakharun

③我ら順繰りの目安定めて 夜旅に出かけるもの

wa-nudliju l-layla "alaa qiyaas

(Qut.186)

いずれも夜旅で星を頼りとする場合、星の東からのトゥルーウ (tuluu" 東昇) と西への入りであるグループ (ghuruub 西没) が、夜中の時間帯や方角を知る上での重要な手掛かりであったことが分かつ。また目安星を定めてその西没を区切りとして、旅立ちや休息、また騎乗から降りて徒歩となったり、その逆にしたりしていたことを物語っている。さらにはそれよりも星観察こそが、夜旅を満喫する対象でもあったろう。最後の③の「順繰りの目安」 qiyaas とは、ここでは距離空間である「乗用ラクダの行程能力 (maqaadiir rukuubi-naa)」と、時間空間である「西没する星と共に夜旅に出立する頃合い (masiiru-naa bi-suquuti n-nujuum)」とされる。同じく③の「夜旅に出かける」の原語 nudliju は、直義は「我々は夜旅の中のドウルジャの時間帯の行動をとる」であり、nudliju は adlaja の一人称・複数・現在形である。そして adlaja はイドウラージュの動詞の形態である。星の西没は他にスクート suquut とも言っているし、より専門的には12宮や28宿の目安星の「西没」はナウ naw' と言って、日の出時に昇る目安星と対星ラキープ raqiib と共に一日の夜、一月の夜、一年の夜の節目節目を形成していた。

夜間の時間帯ドウルジャ (duljah) のことをもう少し述べておこう。ドウルジャとは「夜半過ぎ、深夜過ぎ、夜間の三分の二以降」を過ぎた頃を言う。アラブは夜間を〈三更〉に分ける概念があり、その三更目、すなわち「夜間の三分の二以降」はジャウフとかインクとかの用語を用いる。これよりももう少し範囲が広く、夜半過ぎから夜明け前までも意味する、広い時間帯、これがドウルジャである。これらドウルジャやジャウフ、インクの用語については、拙稿「「夜」、そのアラブ的表象 (中)」『アッサラーム』第22号 (1981年6月) を参照されたい。そして深夜も過ぎて、行動を起こすことも暑く乾燥したアラブ世界では日常的営為であった。このドウルジャの時間帯に行動を起こすことをドウルジャを基にした派生形イドウラージュ idlaaj といっている。その代表が「夜旅・イドウラージュ」であり、この頃旅立ちをして、昼過ぎまでの旅の行程をこなすのである。この辺りの旅の事情は別に拙著『砂漠の文化』第7章「旅と砂漠」を参照されたい。

夜旅は月と星が最も頼りとされた。月がいつ東に昇るのか、何夜月か、中天に達するのは何時か、西に没するのは何時か、こうした月に関する夜空の知識は、そのまま星たちにも適用された。恒星にも、そして惑星にも。月の移ろいは早いし、十五夜までの前半月は没するのが速く後半夜は闇夜となり、逆に一ヶ月の後半の月は昇るのが遅く、前半夜は次第に闇夜となる。また月末には月はず闇夜である。こうした時にも対処して、星々に対する方位と時刻の知識や経験はアラブの遊牧民の間で、夜旅する者の間でしっかり把握されている。夜旅で頼りとなる、目安となる星はドウッリー (真珠星、輝星) と呼ばれた。ここでは指極星の一つ、北極星および北斗七星を主として、旅 (放牧) と星との関連を資料の方から補っておこう。事例1:

ジャーヒリーヤ時代の詩人サラマ Salaamah ibn Jandal は夜旅を次のように謳う:

汝らが許へ 我ら夜旅を敢行す (星明かりの) ランプの下で

wa-nahnu na"shuu la-kum tahta l-maṣaabiḥ

(Ibn Qutaybah 187)

その夜は月が出ていなかったのであろうか。闇の中、ランプとなったのは星たちの瞬きであった。闇夜の澄み切った空の星の瞬きは、また格別の興趣を誘うものだが、ここでは夜行である。それゆえ星の一つ一つが仄かなミスバーフ (misbaah ランプ・燈明) となってくれる。ここでは複数形のマサービーフ (maṣaabiḥ) が用いられており、星月夜を表している。遠くにあるランプや燈明のイメージと重なって星明かりとなる。目を凝らせば、結構闇の大地を仄明るく照らしてくれる。闇夜であって月が頼りにならなければ、そうした夜旅でも星々が明かりとなって夜行を助けてくれるものである。但し雲が出ていたら星＝ランプが消されて闇夜の度が進んでしまう。こうした情景を謳っている。事例2：

夜空の星明かりは仄かな明かり、わずかな光明であって、それを物陰からチラッと見つめる色白の美女、またチラッと顔を覗かせる姿形が美しいガゼルに喩えた次のような詩もある：

星明り 恰もカーテン越しに控える女性か

ka-anna-haa bayna l-sujuufi mu"qib

さなくば警戒して 見守る快活な小鹿か

aw shaadin dhuu bahjatin muraqqib

(Ibn Qutaybah 187)

ナウである星宿もまた夜旅の頼れるドウッリー (真珠星) たちであった。ナウはまた「その時期に降る雨」であることをこんな言い回しでも表している。事例3：

「ご当地ではナウが長引いている」 jarra n-naw'u bi-l-makaan

これを踏まえて詩人フターム Fuṭaam al-Mujaashi"ii は脚韻も揃えて次のように謳う：

両のシマークがナウなれば そこの雨の長引くこと！

jarra bi-haa naw'un min simaakayn

(Lisaan IV 126)

両のシマークとは「突き出たもの＝差し出された手・掌」の義で、星座「乙女座のアルファ星スピカ」と「牛飼座のアルファ星アルクトウルス」、お馴染み「春の大曲線」を構成する両巨星である。そして「素手のシマーク」(al-Simaak al-A"zal＝スピカ)の方は第14星宿に当たり、ナウは4月4日とされている。もう一つの「槍持つシマーク」(al-Simaak al-Raamiḥ＝アルクトウルス)の方は少し北東によって第15星宿に相当しており、そのナウは4月18日とされている。即ち4月上旬に降った雨が長続きしたことを言っている。字義どおりには、ナウは両数を取っておらず単数になっている。それゆえ直義には「両のシマークのどちらか」ということになるが、恐らくこの頃雨天、曇天が続いていて夜空が望めて確認できないためにこのような表現になったのであろう。

星宿を頼りに夜旅を重ねる。その様子はまたこのように謳われる。事例4：

我、頼りとなれるは 道連れと旅荷運ぶラクダ

innii "alaa awniya wa-injiraarii

また星宿と真珠たちを目指して夜旅進める

a'ummu bi-l-manzili wa-d-daraarii

(Ibn Qutaybah 187)

夜旅も季節・時節の指標となる黄道上の28星宿、そしてそれ以外の指標星たち。28星宿の方はそのまま「星宿 (manzil)」と記されるが、指標星たちはドウッル (durr 真珠) から派生させたドウッリー (durriyy pl. daraariyy) と用語化している。ドウッリーとは「真珠のようなもの、疑似真珠＝明るく輝く星、輝星」とシンボル化している。こうした用語を用いての言い回しもあって、興味深い。

砂漠派詩人ズー・ルンマ Dhuu al-Rummah はさすがに砂漠だけでなく、夜旅にも慣れており、星空にも詳しい。指標星ドウッリーを、左手には「仔牛たち」(＝「北斗七星」)と「ヤギ」(＝北極星)と、そして右手には「洞窟」(＝「陽の没する凹み・窪み→西の日没地」)と見定めながら、乗るイビル (ラクダたち) を導きながら、以下のように謳う。事例5：

ラクダたち夜旅進める 仔牛たちのヤギを左手に

tuyaasirna "an jadyi l-faraaqidi fi s-suraa

洞窟を右手にして 歩脚安らかな調べで

wa-yuaaminna shay'an "an yamiini l-maghaawir

(Ibn Qutaybah 188)

ここではアラブ固有の星や星座名が登場する。原語ファラーキド faraaqid とは、「仔牛たち」のことで、「仔牛」一つ一つは単数形ファルカド farqad と言う。「仔牛たち」は固有名詞ファラーキド al-Faraaqid となって大熊座の「北斗七星」を指す。そして北斗七星は複数形なので、個々の「仔牛」はファルカド al-Farqad として知られる。また「北斗七星」の内ベータ、ガンマ星は「二頭の仔牛」としてファルカダーン al-Farqadaan として特に固有名として知られる。そしてそのすぐ近くの指極星たる北極星。これをアラブ世界ではクトゥブ al-Qutb (軸)、まさに天の軸として捉える。インド以東ではわが国も同様であるが、北極星信仰、北辰信仰、妙見信仰など星辰信仰があるが、アラブ世界では古代オリエントの伝統を引いて底深く存在する。ここでは北極星は北斗七星との関連で把握されており、北斗七星はバナート・ナアシュ (棺運ぶ娘たち) であって、北極星はその娘たちを殺した山羊とされている伝承を持つ。北極星はここではこの「ヤギ」ジャドゥイ al-Jady が選ばれている。ジャドゥイとは発音しにくいのでジャディーとかゲディーと平易化された名称で知られている。後半詩行の「洞窟」maghaawir とは、「陽の没する凹み・窪み」の意味で maghaarib 「陽沈む所、西」と同義とされる。単数は前者が maghaar で、後者が maghrib である。すなわちイビルの行進は方角において、北を左手に、西を右手に、即ち北西に向かって進んでいたわけである。

同じくウマイヤ朝の砂漠派詩人ズー・ルンマは別の詩の中で、己の騎乗するナーカ (雌ラクダ) を急がせて次のように謳いかける。事例6：

我ナーカに声掛ける、「仔牛たちすべての輝きを

fa-qultu j"alii duu'a l-faraaqidi kulla-haa

右手に見て 鷺の昇るのを左手に 急ぎ行け」と

yamiinan wa-mahwa n-nasri min "an shimaali-ki

(Ibn Qutaybah 188)

「仔牛たち」とは上述したように「北斗七星」であり、北方を指す。また「鷺」(al-Nasr) とは「鷺座」のことで、そのアルファ星アルタイル (アラビア語 al-Taa'ir 上昇する鷺) は七夕の牽牛、彦星としてお馴染みである。夏見られる星座であるから、季節も夜旅には最適な夏であったろう。詩人は北東に方角を定めて愛駝を急がせているわけである。

次の詩行はムアッラカートの大詩人ラビード Labiid は「仔牛」の星を旅の伴侶の真の友として擬人化して次のように謳う。事例7:

「仔牛」と誓いたり 導きにおいて同行するを

haalafa l-farqada sharikan fi l-hudaa

誰にもまして裏切ること無い真の友なれば

khullatun baaqiyatun duuna l-khulal

(Ibn Qutaybah 188)

夜旅をするものにとって、星々は方向と時間を告げてくれる指標となる。どんな星々も折々の時節の頃合いとともに移動したり、没したり昇って来たりで、そうした時節に従った星々の知識も持ち合わせていないと、方位感や時間感が掴めない。しかしファルカド (al-Farqad 仔牛) たち (=「北斗七星」) は位置こそ違え常に北に存在しており、クトゥブ (軸=北極星) 近くにあつて北の方位をしっかりと指して間違いない。夜行の導き手として、裏切ることのない同行者なのだ。

夜旅の指標になっていただけではない。ファルカドたち「北斗七星」は夜間放牧を行う遊牧民にとっても、常に方位感や時間感の指標となっていた。放牧地 (mar'aa) に向かうイビル (ラクダたち) を謳って詩人バドウィンであるアブー・ナジュム Abuu al-Najm は以下のように謳う。事例8:

ラクダたち「両の仔牛」の風を受け、足取り広く歩む

Wa-hiya hiyaalu l-farqadayn ta"talii

(Ibn Qutaybah 188)

「両の仔牛」al-Farqadaan とは上述したように、北斗七星のベータ、ガンマ星を言うのが定説である。が、指極星としての代名詞ならば、むしろ北極星と北斗七星をそれぞれファルカド「仔牛」と見做して「両の仔牛」l-farqadaan と解釈した方が妥当していよう。本詩の farqadayn は l-farqadaan の斜格の語形である。夏の夜間放牧なので、「両の仔牛」からの風とは北からの涼風を意味させている。その「両の仔牛」からの涼らかな風を受けて、放牧地に向かうラクダたちの歩様も、生き活きと幅広くとって軽快となる様を叙している。

夜旅と星、今までは指極星の一方、北極星と北斗七星の引用資料を見て来た。他にも同じく南の方角を指し示す指南星である、スハイル (Canopus) があるし、この星はアラブでは親しまれておりさまざまに叙述されている。また他の恒星シリウスやアルクトゥルス、ヴェガ、フォーマルハウトなど、黄道12宮および28宿に入っていない星々もドウッリー (真珠星) として指標とされているが、別稿に譲ってここでは割愛する。

おわりに

以上「時制」の大まかな概念の中で、「時」そのものの概念とその用語の事例と分析、及び「一日」について、「朝・昼・夕」について、「昼の分割概念、時間帯」について、述べた。次に昼および太陽と密接な関係にある「光 (陽射し・陽光) とかげ (陰・影)」について、そして光が作り出す「陽炎」、「蜃気楼」について言及した。最後に昼旅と夜旅について、時と旅との関連、さらに「夜旅」の補足に言及しておいた。アラブがどのような「昼の文化」の伝統概念を持ち合わせているかを考察した。そしてこれは一日の他の半分である、「夜の文化」と対照されねばならない。気候風土か

ら推してアラブでは「夜」の占める日常性の比重が大きいこと、「夜」の多様な表象の一端は既に前稿で述べてある。今回の昼中心の時制考察と合わせれば「一日」の時の刻むアラブの考え方の一端、大まかな把握は理解できたことではなかろうか。昼の生活は夜のそれが補われてこそ、しかも大きな比重を持って補完されていたからこそ一日の生活と言えたのである。これこそ、環境適応を見せたアラブの基層文化の特徴だったのである。アラブが世界の主舞台に立ってアラブ・イスラム文明の主役を担って時代を築いたことは、こうした地誌や自然観に基づいた日常性の観点からの視点を変えれば、異化の活性化のアプローチも必要であろう。

【引用・参考文献】

- Al-"Aklī M.M. : Ibn Seerīn's Dictionary of Dreams, Pennsylvania(USA), 1992
- Allen R.H. : Star Names Their Lore and Meaning, New York, 1963
- "Askari A.H." : Jamharat al-Amthāl, 2vols, Beirut, 1988. 本稿略号 Ask.
- "Awdu Illah A.S. : Tafsiir al-Aḥlām, Cairo(Daar al-Tibā'a al-Hadiithah), n.d.
- Ph. Bammorrough : Treasures of Islam, Blandford Press (G.B.), 1976
- バートン、タムシン著 豊田彰訳『古代占星術—その歴史と社会的機能』、法政大学出版局、2004
- Baydaawii : Anwaar al-Tanzīl, Cairo, 1968, 2vols.
- ピールーニー著 山本啓示・矢野道雄訳『占星術教程の書』(1)『イスラーム世界研究』第3巻2号(2010年3月) PP.303-371
- ボッテロ、ステーフ著 矢島文夫訳『メソポタミア文明』創元社、1994
- J.L.Burckhardt : Notes on the Bedouins and Wahabys, London, 1967.
- R.F.Burton : Personal Narrative of a Pilgrimage to al-Madina and Mecca, New York, 2vols. 1964
- Pierre Cachia : Popular Narrative Ballads of Modern Egyptian, Oxford Press, 1989.
- M.Ibn Muusa al-Damiirī : Ḥayaat al-Ḥayawaan, Cairo (Daar al-Tahriir), 2vols. 1965. 本稿略号 D または『動物誌』
- C.M.Doughty : Travels in Arabia Deserta, New York (Dover ed.), 1979
- グタス、ディミトリ著 山本啓二訳『ギリシャ思想とアラビア文化—初期アッバース朝の翻訳運動』勁草書房、2002
- al-Hamadhanī, Ahmad Ibn Husayn : al-Maqaaamat (Muhammad Abduh 改訂), Beirut, 1889. 堀内勝訳誌。本稿略号「ハマザーニー」
- 『マカーマート』(1)『イスラーム世界研究』第5巻1-2号(2012年2月) 216—298頁。
- 『マカーマート』(2)、同上誌第6巻(2013年3月) 305-427頁。
- 『マカーマート』(3)、同上誌第7巻(2014年3月) 刊行予定。
- Charles Hamilton : The Hedaya, Commentary on the Islamic Laws, New Delhi, 1979.
- "Arafaan Hammur : Mawaasim al-"Arab al-Kubraa, 2vols, Beirut, 1999
- al-Qaasim al-Hariirī : al-Maqaaamat, Beirut, 1965.
- 和訳 堀内勝、『マカーマート』平凡社東洋文庫、2008-09、3vols. 本稿略号「ハリーリー」
- "Abbaas Hasan : al-Nahw al-Waafii, Cairo, n.d.4vols.
- J.G.Hava : al-Faraa'id al-Durriyyah, Catholic Press, Beirut, 1951
- 田村秀治他訳『詳解アラビア語—日本語辞典』ユニテッド・パブリッシャーズ 1980
- Ibn Hazm : Jamharah Ansaab al-"Arab, Cairo (Daar al-Ma'aarif), 1971. 本稿略号『アラブ系譜集』
- Ibn Hishaam : al-Siirat al-Nabawiyyah, Cairo, 1955
- 英訳 A.Guillaum : The Life of Muhammad, Oxford Univ.Press, 1968
- 堀内勝 : 『砂漠の文化』教育社新書 1979
- ：『ラクダの文化誌』リプロポート 1986
- ：『星と動物 獣帯(黄道12宮)—アラブ・イスラム世界のフォークロア—(1) 雄羊・雄牛・双子、(2) 蟹・獅子・乙女、(3) 天秤・蠍・射手、(4) 山羊・水瓶・魚』『アリーナ』第10、12、14、15号2010年12月～2013年5月
- ：『アラブ遊牧民のカレンダー、星の歳時記』『アリーナ』第16号460～525、2013年12月
- T.P.Hughes:Dictionary of Islam, Clifton, New Jersey, 1965
- S.H.Huuke : Middle Eastern Mythology, Pelican Book, 1963
- Abu l-Faraj al-Isfahani : Kitaab al-Aghaani, Cairo, n.d., 24vols.
- al-Jaahiz : Kitaab al-Ḥayawaan, Cairo (Daar al-Tahriir), 7vols. 1965. 本稿略号 J または『動物の書』
- al-Jalaalain, al-Mahlii & al-Suyuuti : Tafsīr al-Jalaalain, Cairo (Maktabah al-Jumhuuriyyah al-"Arabiyyah) n.d.

- al-Jamal I.M. : Tafsīr al-Aḥraam, Cairo (Maktabah al-Qur'aan), 1980
- M.H.Jurdaak : al-Qaamiis al-Falakii (Astronomical Dictionary), Beirut, 1947
- W. Lane : Manners and Customs of the Modern Egyptians, London, 1954.
部分邦訳 大場正史 『エジプト風俗誌』 桃源社、昭和39年。
- W. Lane : Arabic-English Lexicon, New York, 1995年版、1863、初出版、8vols.
- Lunde and White : A Dictionary of Arabic and Islamic Proverbs, London, 1984.
- マッコール、ヘンリッタ著 青木薫訳 『メソポタミアの神話』 丸善ブックス、1994
- 前嶋信次 : 『イスラムの陰に』、河出書房新社、1975
- 前嶋信次・池田修訳 : 『アラビアン・ナイト』 平凡社東洋文庫、全18巻。
- al-Maktabah al-Thaqaafiyah 編、Abuu Ma'shar al-Falakii al-Kabiir li-r-Rijaa' wa-n-Nisaa', Beirut, n.d.
- Ibn Manzūur : Lisaan al-"Arab, Beirut (Daar Saadir), 1990.
- al-Mas'uudii, Abu al-Ḥasan : Muruuj al-Dhahab, Beirut, 1965, 4vols.
- 中山茂 『占星術』 紀伊國屋新書、1964
- A. al-Maydaanii : Majma' al-Amthaal, 2vols, Cairo, 1955. 本稿略号 May.
- al-Nasafii, "Abdullaah ibn Aḥmad : Tafsīr al-Nasafii, Cairo, n. d. 4vols.
- ニザーミー著 岡田恵美子訳 : 『ライラとマジヌーン』 平凡社東洋文庫、1981
- Abuu Nuwaas : al-Diwaan Abii Nuwaas, Beirut, 1953
- al-Qazwiinii Zakariyaa; "Aja'ib al-Makhlūqaat, Cairo, 1401/1981. 本稿略号 Qaz.
- al-Qurtubii, M. A : al-Jaami' al-Aḥkaam al-Qur'aan, Cairo, n. d. 8vols.
- Ibn Qutaybah : Kitaab al-Anwaa' fii Mawaasim al-"Arab, Cairo, 1956 本稿略号 Qut. または『アンワーウ』
al-Ma'aarif, Cairo (Daar al-Ma'aarif) 1969.
: Uyuun al-Akhbaar, Cairo, 4vols, 1963
- M.A. Qutb : Daliil al-Ḥayraan fii Tafsīr al-Aḥlaam, Cairo (Daar al-Tibaa' al-Ḥadiithah), n.d.
- al-Saraqustii 著 J. T. Monroe 英訳 : al-Maqaamaat al-Luzuumiyyah, Brill, 2002
- 佐藤次高・柴田三千雄 : 『生活の技術 生産の技術』、岩波書店、1989
- Y.A.al-Shiiraawii : Taqwīm al-Shiiraawii, Bahrayn , 1994
- M.ibn Siiriin : Asraar al-Manaam fi Tafsīr al-Aḥlaam, Cairo (Daar al-Tibaa'a al-Ḥadiithah), n.d.
- F.Steingass : A Learnaer's Arabic-English Dictionary, Beirut, 1972
- al-Su'dii, Muḥammad ibn Amiir : Maṭaali' u al-Saadaat, Paris, Bibliotheque national de France 所蔵。
- J.al-Suyūṭii : al-Mazhir fii "Uluum al-Lughah wa-Anwaa'i-haa, Cairo (al-Ḥalabii), n.d. 本稿略号 Suy.
: Ta'riikh al-Khulafaa', Cairo, 1964.
- Swietochowski & Carboni : Illustrated Poetry and Epic Images, The Metropolitan Museum of Art, New York, 1994
- Ibn al-Jariir al-Ṭabarii : Ta'riikh al-Rusul wa al-Muluuk Cairo (Dar al-Ma'aarif), 1977~90, 11 vols
- Aḥmad Taymur : al-Amthaal al-"Aammiyyah, Cairo (Markaz al-Aḥraam), 1949
- R.C.Thompson : Semitic Magic, London, 1908.
- Al-"Usfuur M.M. : Fii Ta'biir al-Ru'yaa wa-l-Manaam, Kuweit, 1406/1986
- al-Ṭuukhii "A.S. : Aḥkaam al-Ḥakiim fii "Ilm al-Tanjiim, Cairo (Maktabah al-Qaahirah), n. d. 6vols.
- W.Wright : A Grammar of the Arabic Language, Cambridge Univ. 1962 2vols.
- 山本啓示 「初期アッバース朝と歴史占星術—アブー・マアシャルの『宗教と王朝の書』について」『オリエント』第44巻第2号 (2002年3月)
- 「アッスーフィーにおけるギリシャ星座の伝承と変容」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第7回第2号 (1986年3月)
- I."U. al-Zamakhshari : al-Mustaqsa, 2vols, Hayderabad, 1962 本稿略号 Zam.
: al-Kashshaaf, Cairo, 1966, 4vols.
- ポングラチェ・ザントナー著 (種村季弘他訳) 『夢の王国』、河出書房新社、1987